
独立機甲義妹旅団！パンツァー・グレナディア

神風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独立機甲義妹旅団！パンツァー・グレナディア

【Nコード】

N7737A

【作者名】

神風

【あらすじ】

ある日、旧日本軍の軍人だった祖父の蔵を整理していた主人公は

…

いち 会敵（前書き）

粗雑な文です。ごめんなさい

いち 会敵

「うわぁ…すごいなこれ」

重厚な木製の分厚い扉をあけると中にはたくさんの骨董品やら昔の書物やらが溢れていた。

「さすがは蔵屋敷…こんなのドラマでしか見たことないよなぁ…」

ため息に似た感想を口からもらし、蔵屋敷のなかに足を踏み入れた。すこしひんやりした空気が充満している。

なかへ2、3メートル歩を進めてから一言。

「…物ありすぎだろ」

立ち並ぶタンスに物で溢れる木製の棚の数々、スペースが無かったのか直接地面に置いてあるほど物が大量にあり、そして散乱していた。

お世辞にも整理整頓されていますね、とは言えない。

「これは…相当苦勞しそうだな」

大きく息を吸い込み、

「ハアアアアアア」

渾身のため息をついた。

ことの始まりはちょうど四日前だ。

自宅で仕事をしていると突然電話が鳴った。

仕事を一時中断して受話器を取る。

「中央病院ですが。佐伯俊夫さんのお孫さんですか？」

そうだと答える俺。すると、

『おじいさんがお亡くなりになりました』

無感情にそう伝える電話の向こうの女性。

「…は？」

『おじいさんがお亡くなりになったんです。急なことだとは思いますが、今からこちらに来れますか？』

「……」

『もしもし？』

「…今すぐ行きます」

ほんとに急なことで、想像もしていなかったことを告げられた俺は、病院に向かって車を走らせている間も頭の中はこんがらがっていた。病院に着いて案内された部屋に入ると、ホントにそこには冷たくなつて動かないじいちゃんの体がベッドの上に寝かされていた。

その横で広すぎるじいちゃんの屋敷の手入れをしていた家世婦さんが、流れ出る涙をハンカチで必死に拭き取っていて、それを見た時にはじめて俺はじいちゃんが死んだということを実感とともに認めることができた。

俺にとってじいちゃんは父親であり母親だった。

俺の本当の両親は二人とも医者で正義感が強かったらしく、国境なき医師団に二人揃って所属していた。母親は俺が四歳の時に、俺をじいちゃんに預けて父親と一緒に国境なき医師団の一員としてアフガンに向かった。

じいちゃんはそんな父と母を誇りにしてた。そしてずっともうすぐ帰ってくると俺に言い聞かせてた。

でも両親は帰ってこなかった。ソ連とタリバンの戦闘に巻き込まれて、ソ連戦車の流れ弾に診療所ごと吹き飛ばされた。複数あった遺体は判別不能なほど損傷していたと後で聞いた。

それからじいちゃんが親代わりをしてくれた。俺のなかにぽっかりあいた両親の穴を埋める為にたくさん愛情をそそいでくれた。

休みの日はどこかに連れていってくれたし、旧日本軍の高級軍人だったじいちゃんは貴重な戦争の話もしてくれた。

じいちゃんの愛情のおかげで俺は両親の穴を埋めることができた。

そんなじいちゃんが死んだ。

昔からじいちゃんには、男が泣いていいのは親と嫁さんが死んだ時だけだ、と常々言い聞かされていたので俺は泣かなかった。というか必死でこらえた（もつとも親が死んだ時も泣かなかった。幼い子どもは死体をこの目で見なければ人の死を理解できないらしい）

じいちゃんは親戚も友人も少なかったので通夜や葬式は質素にすませた。

俺はじいちゃんの結構な額の預金と不動産資産を引き継いだ。

そして相続税関係で遺産を整理しようとして今にいたる。

「こいつは…今日一日では終わらないかも…」

手伝ってもらうために人を呼んでまた今度の機会にすべきかと思ったが、何分こういう性格。思ったことはすぐ実行せねば気が済まない。

「まあ、とりあえずできるかぎりやっておこうか！」

そう思って目の前に積まれた乱雑なゴミ…もとい骨董品の品々に手をつける。

壺 （とても高価そうには見えない）

湯飲み （同じく。底に別府温泉という文字が書かれてある）

なにかの書物 （ボロボロで読めない）

旧日本軍の小銃 （じいちゃん兵隊だったもんな）

刀剣 （菊の御紋入りだ。これも日本軍のものだろう）

女性物の黒いハイソックス （……ん？）

小さなメイド服 （あれ？）

ネコ耳カチューシャ （ちょっと待て！）

「じ、じいちゃん……」

目の前に不思議なオーラを発しながら悠然と横たわるコスプレ三点グッズ…

「これは…遺産として数えていいのだろうか…」

ただのパーティーグッズだよね、じいちゃん…

そう思った時、目の前に積まれた無数のガラクタがバランスを崩して崩壊する。

「うおお?! 危ない!」

間一髪ガラクタのナダレをかわした俺の両手はかのコスプレ三点グッズを抱き抱えて死守していた。

崩壊の衝撃で巻き上がる埃の向こうに何かが見える。

「…ん?」

よく見えないので足下のガラクタを除けながら近づくと、そこには人がすっぽり入るような大きい長方形の黒い箱が横たわっていた。

「なんなんだ? これ。でっかいな」

何かお宝の匂いがする。

「おつ、…開くぞこれ」

俺は興味本位で黒い長方形の箱を開けることにした。もしかしたら

金銀財宝が…あってもおかしくない！

「御開帳！！」

ガバツ！

俺はときめくワクワクなハート（期待でワクワクテカテカした気持ちのこと）とともにフタを両手で勢いよく開ける！

そこには、きらびやかに輝く金が！銀が！財宝が！

あるはずもなかった。

だが俺は、落胆しなかった。

いや、できなかった。

箱のなかにあったものは金でも銀でも財宝でもなく、それらよりもっと衝撃的なもの…

「お、お、お、

おんにゃのこ?!」

そう、箱のなかには女のおんにゃの子が横たわっていたのだ。

「ちよっ…え、マジ?!」

信じられない光景だった。

箱のなかにはふわふわしたセミロングの金髪がかわいらしい10歳前後の、おそらく西洋人の女の子が目をして静かに横たわっている。

「し、死んでる?!」

胸の鼓動が凄い。

俺は箱のフタをとりあえずよこに置いて、目を閉じた。

「OK、焦るな俺。まず深呼吸だ」

深呼吸で自分を落ち着かせる。

胸の鼓動が正常になるのが分かった。

「よく考えろよ。普通、一般人の蔵屋敷のなかに置いてあった黒い箱のなかに女の子や死体が入ってるものか？」

いや、まずない。

「そうだろう、まずそうだろう。そこから察するにだな、俺が結論するならばこれは……」

「ただの人形だ……!!」

うん、それが一番妥当な解釈だ。

さっきのネコ耳カチューシャといい、じいちゃんは萌え系のものが好きだったんだよ、きっと!。それはそれで向き合いたくない事実だけどさ。

そう思うと急に安心した。

「にしても、よくできた人形だな」

あえて言おう、美少女だと。

綺麗な髪。

かわいらしい流線型の輪郭を持った顔。

閉じていても分かる大きな瞳。

ながいまつげ。

西洋服を着こなすスレンダーな体。

そして…

未発達ながらもふっくらと膨らむ二つのムネ…

ゴクリ

「…?! な、なんで俺は生唾を飲んでるんだ！ その、いくらなんでも駄目だろ！ 相手が人形だからって… ひ、人として… こによこによ」

「……………」

「… ちょっとぐらいなら、いいよな」

欲望に負けた俺はおもむろに右手をのばす。

「ど、どうせ人形だし、な」

そしてのばした右手が…

ついに男の憧れに接触した。

「や、柔らかい…！」

鼻血が吹き出そうになった。

恥ずかしながら、これが女性のおっぱいとファーストコンタクトです。

「す、すごいな…」

俺はムネに夢中になった。ムネが頭のなかを支配していた。

だってファーストコンタクトなんだもん。

「連邦のおっぱいは化け物か!!」

「…何をしている」

「うるさいな!今はおっぱいで忙しいんだ!邪魔するな!」

「それは私のムネだろう。なら私には私のムネを揉み続ける貴方に質問する権利があるはずだ」

「私私ってなあ…………え?」

ふとおっぱいから視線を上げると、人形だと思っていた少女の瞳がひらいてこちらを見つめていた。

「……………あ」

「なぜ貴方が私のムネを揉んでいるのか、説明していただきたいのだが」

俺を睨みつける美少女。

凍りつく空気。

死にたくなる俺。

「質問に答えてもらいたいのだが…なぜ貴方が私のムネを揉ん…」

「ち、ちちちち違うンデスヨ?! 君が息してなかったから人口呼吸をしようと思って…」

「人口呼吸の為にはムネを揉む必要があるのか？」

「ごいません。」

「いや、だから、ここは俺がじいちゃんから貰った屋敷でそこに君がいてそれでその」

「つまり、ここは貴方の家で、貴方はそこにいた私を見つけて私のムネを揉んだと」

ああ、自白してしまった！

「ふむ」

少女は上半身を起こす。

「あ、ああ…け、警察だけは…」

「なるほど」

「なんでもするから警察だけは勘弁してください！！魔がさしただ

けなんです!」

「つまり…」

「ほんとに、ホントに魔がさただけで…!」

「つまり、貴方が私の所有者だな?」

「…へ?」

突然のことに理解不能になる。

「そういうことだろう、ここは貴方の家で、そこに私がいた。だから私の所有者は…」

「ちょ、ちょっと待て!所有者って何だよ?!というか、君はそもそも一体何者なん…」

「…話の途中すまない」

「?!…な、何？」

「そろそろ私のムネから手を離していただけないだろうか？さっきから力が入って少し痛いんだが…」

ふと気がつくと、俺の右手はこんな時にも彼女のおっぱいをガッツリキープしていた。

「…ゴメンナサイ」

「いいんだ、気にするな。男とはそういうものだからな」

こんな子供にフォローされている自分を殺したくなった。

にい 対談（前書き）

疲れる…（「A、」）

にい 対談

西暦 1945 5月 2日

インド洋 水深 150 m 地点

暗い艦内、疲れきった乗組員、流れ込む海水の音と潮臭い臭い、ボロボロに傷つけられた艦体

無言の内に過ぎるこのとりとめもない数秒間のあいだにも浸水は続き、酸素は消費され、32名の乗員は死に向かって行進し続けている。

もう我々に逃げる場所などどこにもないし、そうする余力さえ残っていない。

このまま浸水による溺死を迎えるか、運がよければ酸欠で死ぬまで生き続けることができるだろう。

だが、どのみち死ぬのだ。この狭苦しく薄暗い潜水艦の腹のなかで、みんなそれが分かってる。

絶望と、栄光ある潜水艦乗りとしての誇りとが混ざり合った不気味な瞳。

誰も一言も喋らず、異様な雰囲気が艦内を満たす。

ふと胸ポケットのなかから一枚の写真を取り出した。

写ってるのはまだ幼い子供、ヒトラー・ユーゲントの制服を身に待とう笑顔がかわいい少女。

かけがいのない娘。

（そうだ。１１歳の誕生日には戻ると約束したんだ）

娘との大事な約束を思い出した。

そうだ、大事な約束だ。

私は帰らなければならないんだ。

突然私の頭のなかで娘との約束のことではいっぱいになり、戦争も名誉も義務も国家も、全てが馬鹿馬鹿しくなった。

一体私はこんなところで何をしているんだ？

家に帰らなければ！

そして私はおもむろに艦内放送のマイクを持つと、静かに口を開いた。

『諸君、艦長のホフマンだ。よく聞け。我が潜水艦、U - 158とその乗組員は総統特命を受けてからの四ヶ月間。強大な連合側の包囲網と追撃を相手に尽力・健闘し、ここインド洋にまで到達するという最大の成果を挙げた。』

しかし残念ながら本艦は、連合側の執拗な攻撃により爆雷七ツを至近弾で食らうに及びもはや作戦遂行は不可能である

浸水は止まらず、スクリューは回転せず、よもや援軍などが来るはずもない。我々は敵陣のど真ん中で確実に死に向かっている』

淡々と絶望的な状況を述べる。みんな黙って私の話を聞いている。

『私はここに艦長として決断した。』

本艦はこれより海面に浮上し武装解除、今現在我々を追撃している英海軍に降伏する

作戦は終了、今をもって全乗組員の任務を解除する。みんなご苦労だった。

家に、家族の元に帰ろう』

乗組員が突然の降伏命令に驚いて驚愕の表情を浮かべたその時だった。

「艦長！」

黒衣の軍服を身に纏った一人の男が駆け込んできた。

「…シュトライヒャー大尉か」

「艦長、なんなんださっきの艦内放送は！降伏など何を考えてるんだ？！」

「言葉の通りだ、我々は降伏する」

「そんなことが認められるはずがないだろうが！世迷いごとを言うてる暇があるなら、今すぐ艦を発進させろ！」

「聞いていなかったのかシュトライヒャー大尉。浸水で駆動部分と蓄電器がやられたんだ、たかだか時速3ノットで英軍を振り切れると思ってるのか？」

「そんなことは問題ではない！すぐそこに東南アジアの島々が待っているんだ！そこまでたどり着くだけだ、後は日本海軍に…」

「それが無理だと言ってるんだろうが！」

私は声をあげた。

「シュトライヒャー大尉。貴様がヒトラーから受け取りこの艦に持ち込んだあの黒い箱がどれほどの軍事機密かは知らないが、私はヒトラーの忘れ形見と一緒に心中する気はないぞ」

「何だと…?!」

「ヒトラーの命令など聞いていられるか。今頃あいつのいるベルリンはソ連軍が分取ってるだろうよ」

「黙れ!!」

そう叫んでシュトライヒャーはホルダーから抜き出した拳銃を私に突き付けた。

目が血走っている。

「二度とは言わないぞ、進路は東だ…東に向かえ!」

それから61年後
極東アジア 日本

「粗茶ですが…」

「わざわざ申し訳ない、いただく」

そう言つて金髪碧眼の少女は大きめの硝子コップに入つた氷入り麦茶を一気飲みした。

「ふはあ…。美味」

見た目10歳ぐらいの可憐な少女には似つかわしくない行為だったか、一気飲みした後の満足げな顔は実に輝いていた。

はつきり言つてかなりの美少女だ。文句無し的美少女だ。最高だ。

サラリとした金髪、パチクリした蒼い瞳、透き通るような淡い白肌、

そして…小さく柔らかい（確認済み）…マシユマロおっぱ…

（俺は何を考えてるんだ?!）

暑さで少し頭がおかしくなっていたようだ。今はそんな場合では無いというのに！

《現在の状況》

謎の金髪碧眼美少女

推定年齢10歳。今は亡き俺のじいちゃんの蔵から発掘される。かなりの美少女で発育途中のおっぱいを俺に揉まれる。身元不明。なぜ俺を所有者と呼ぶ。

俺（25）

容疑者。眠っていた金髪碧眼美少女のおっぱいを揉むなど猥褻行為をした疑い。犯行現場を美少女に目撃される。美少女が被害届けを警察に提出したら一貫の終わり。

結論すると、俺は非常に混乱しているし危機的状況にいる。

欲望にまかせて美少女のおっぱいを揉んだのはいいが、その時美少女が目覚まし、犯行現場を目撃され、なぜか所有者と言われた。

今は死んだじいちゃんの和風邸宅でとりあえず美少女をもてなしている。

「あ、あの……」

「む？」

「あのことだけども…」

「あのこと、とは？」

「ほら、さっきの蔵の中でさ…ね…眠ってる君の…アレにソレして…その…」

「貴方が私の胸を揉んだことだろうか？」

「そう、そのことだけど…その…ごめんなさいー!!」

ばん!!

俺は全力で頭を下げ、美少女に渾身の土下座を披露した。

「魔がさしただけなんです!!今は反省してます!!だからどうか警察だけにご勘弁くださいませお代官様ア!!!」

「…あの…」

「君の程よくふつくらしたおっぱいが罪なほどに魅力的だったから！！」

「私は貴方に胸を揉まれたことはまったく気にしていないんだが」

「そうでしょう！君がどれほど不愉快だったかは想像に難くない……え？」

「私はまったく気にしていないし、不愉快でもなかった。貴方が謝る必要は無いと思う」

「え？あ、…そう？」

「うむ」

「…なんだ、取り越し苦労だったのか？まあ、よく考えればまだ子どもだし…そんなにおっぱい大きくないし（失礼）身構える必要なんてなかったんだ。」

「なーんだ、ただの考えすぎじゃん！もう！俺のあせりんば！」

「はは、そうだよねえ（笑）なに考えすぎてんだろ俺（喜）」

「まったくだ。大体貴方は私の所有者であってだな…」

「そうそう、俺は君の所ゆ…」

「私の胸を欲望に任せて揉みしだくのも私を押し倒すのも所有者である貴方の自由であり…」

「ちょっと待て」

「む？」

そうだ、今までおっぱい事件に気を取られていたがそれよりもっと気にすべき事案がいろいろあるじゃないか！

そもそもなんでこんなあきらかに外人の金髪碧眼美少女が日本の住宅街の蔵のなかに保管されてて、見ず知らずの俺を所有者と呼ぶんだよ！

「君さ…なんであんなところで眠ってたの？」

「…さあ？」

「…両親は？」

「いるんじゃないか？」

「名前は？」

「覚えてない」

「なんで日本語話せるの？」

「NOVAで習ったんじゃないかな」

「出身地は？」

「地球」

「分からないことだらけかよー！」

さすがにねをあげた。まさかこれほど謎が多いとは…

しかも俺を所有者とわけのわからんことを言う。

これからどうすればいいのだろう？

「…警察呼ぶか」

「?!」

俺がポツリとこぼした言葉に少女が機敏に反応した。

「け、警察を呼ぶとは、私を警察に引き渡すということか?!」

「だってそうするしかないだろ？」

「いやだ!」

「うわっ!ちょ」

いやだと叫んだ少女がテーブルを越えて抱き付いてきた。

「警察なんていやだ！私はここにいる！」

「ちょ、いい匂い…じゃなくて！そんなこと言っただってなあ、身元不明の子を置いておくわけにはいかないし」

「身元不明なんかじゃない！身元はここだ！」

「そんなこと言っても…」

「お…お願いだ…私には、ここしか…えぐ…」

「?!わ、わかったわかった！警察呼ばないから！だから、泣かないでえ！」

「うぐ…ホントに、ホントに警察呼ばないか？」

「うん、ホントホント！」

「や…」

「やったあ!!」

「うぐつ。ちょ、きつく抱き付くな! 苦しい! いい匂いだけど!」

「さすがは私の所有者だ! 貴方のことは好きになれそうだ!」

「ええ、好きつて?!」

10歳の少女に好きという単語を吐かれて反応する俺。

かの少女はひと悶着終えて冷静さを取り戻したようで、抱き付いていた俺から離れた。

(ああ、もう少し抱き付いてもよかったのに…)

「ふむ…ところでだ」

「ん?」

「私には今名前が無い。だから貴方に名前をつけてもらいたい」

「え、今?」

「もちろんだ。そうでなければ何かと不便だろう」

「急に言われてもな…うーん、蔵で出会ったから…蔵…クラ…ク…
クー…“クー”でどうだ？なんか外人っぽいし」「“クー”か。う
む、なかなかお洒落でいい名前だ！」

少女も、いや、“クー”も気に入ってくれたようだ。

「次は貴方の呼び方だな」

「へ？」

「見かけの年の差がこれだけあるのに“貴方”と呼んでは周りに
にいない誤解と噂を招きかねない。そうだな…

“おにいちゃん”

ではどうだろうっ？」

「おにいちちゃん？」

【おにいちちゃん】

お兄・ちゃん（onii-chan）

名詞（萌え用語） 主に妹に使われる場合対象の心拍数を上げる効果を持つ。義妹の場合効果は三倍になる。容易に男性層の読者を掴むことができる為ネット小説で乱用されている。

「ええ？！そ、それは…！（赤面）」

「ふむ、やはり少々馴れ馴れしいか。貴方の本名は？」

「（あっさり却下か…）佐伯 ユキだけど…」

「では“ユキ”でいいな。うむ、シンプルイズベストだ。よろしく、ユキ！」

「…ボソツ（やっぱりおにいちちゃんのほうが…）」

「む、何か言ったか？ “ユキ”」

「ナンデモナイデス」

さん 探索（前書き）

無理して書きました。今は反省しています…

さん 探索

ギィ……

分厚い倉屋敷の扉がゆっくり開く。

そして俺と謎の金髪碧眼美少女クー（推定年齢10歳）は倉屋敷の中に足を踏み入れた。

当然だが相変わらず中はゴチャゴチャしている。

「さあ、来たぞ！我が家の秘宝館！」

「見たところ、ガラクタしかなさそうだが…」

「言ってくれるね」

今は亡きじいちゃんの倉屋敷で出会った言葉遣いが異常に大人びている謎の金髪碧眼美少女クー。

寝ているクーのおっぱいを揉んでしまった俺は、警察の猥褻行為を視野に入れた立件を恐れクーにマツハ土下座で謝罪し被害届け提出

を阻止しようとした。そしたらクーはあっさりと俺を許し（もとから警察に訴えるつもりはなかったらしい）事態は一見落ち着いたかに見えたがなぜかクーが俺と一緒に暮らすと言い出した。

訳が分からないままとりあえず快諾（？）したのだが身元不明の少女を簡単に引き取る気にもなれず、クーを発見した場所、つまりじいちゃんの倉屋敷でクーの身分証明に繋がる物を捜すことにしたのだった。

「さて、探すとしますか」

「なんかお宝探してみたいだな、ユキ。少しわくわくしてきたぞ！」

クーの目がにわかに輝きだした。

雰囲気や言葉遣いは大人っぽいが、やはり子どものような。かわいらしいもんです。

「よし、クーはそっちを。俺はこっちを探す！」

「わかった、まかせろ！」

探索開始

がさがそ がさがそ こそこそ

(…ガラクタばっかだな。クーに関する物は何も見つからない)

10分後

こそがさ こそがさ がさがさ

(…ほんとにガラクタばっかな。今のところ一番高価なのがアイス棒の当たり一本ってどうなんだこれ)

30分後

こそこそ こそこそ がさがさ

(……ん?)

ガラクタの山を探していると、その奥に何か袋に包まれた長方形の

物を見つけた。

（なんだこれ）

その袋に包まれた長方形の物を引っ張りだし、袋の中に入っている長方形の物を取り出す。

そして、中に入っていた物を見た時、俺の全身に衝撃が走った。

（こ、これは……！！？）

それはツルツルした紙質の雑誌で、カラフルな巻頭にはセーラー服に身を包んだグラマーな女性達が挑発的な目をして立っていた。

そこにはこう書いてある。

『月刊！女子高生活　～美少女達の花園～』

……どう考えてもエ　本です。

（……ネコ耳メイドのコスプレグッズといい　口本といい……じいちやんにはいろいろと驚かされるよ）

「ユキ、手に持つてるその本はなんだ？」

「ああ、これはエ…うわぁっと！！？」

エロ本を眺めていたら、いきなりクーが後から覗きこんできて驚き慌ててエ本を隠す。

びっくりした。

「な、な、な、なんでも無いよ?!」

「白々しいな…今隠したやつを見せろ！」

そう言つてクーが俺に飛び付いてきた。

柔らかなクーの体の感触が伝わってくる。実に気持ちいい。

「ほら、早く見せろー！」

「駄目えー！子供が見る物ではありません！」

クーの柔らかな感触を楽しみながらも俺は必死に 口本を死守し続けた。

だが、すったもんだしているうちにバランスを崩してしまい…

「おお?!」

ガシャァン!!

つまずいてオンボロの棚に突っ込んでしまった。

盛大にガラクタが崩れ落ち、埃が舞い上がる。

やってしまった。

「いてて…く、クー、けがないか？」

「けほけほっ。ん?んん…大丈夫だ。かすり傷一つない」

「そうか…そりゃよかった…」

クーの無事を確かめて身を起こそうとした時だった。エ 本をにぎりしめていた左手に違和感を感じた。

「？」

見てみると、崩れ落ちてきた壺が割れて、醤油のようなどす黒い液状の内容物が派手に俺の左手と工本にぶつかっていた。

「うおお？！なんてこつたあ！！」

もはや 口本は死んでいた。

「そんな！まだ一ページも開いてないのに……」

「む！ユキ、そんなことよりあれを見る！！」

クーが小さな手で俺の肩を引っ張る。

「そんなことって……後で見ようと楽しみにしていたのに……」

恨み言を言いながらクーが指差す方向を見た。

「クー、何があ……！？」

そこには、俺達が出つ込み壊してしまった大きな棚の裏には、二つの大きな黒い長方形の箱が誰かから隠すようにひっそりと置かれてあった。

「なあ、あれは私が入っていた箱じゃないのか？」

「…そうだよ」

探索開始から40分あまり。ようやくクーに関係ありそうなものを見つけたのだが、

すでにその時俺は、なーんか嫌な予感がしていた。

よん 増強（前書き）

（ ・ ・ ） 更新速度遅めですかね

よん 増強

みゝーん みゝーん みゝーん

ジワジワジワジワ

ツクツクホーシ ツクツクホーシ

なんだろう、この昆虫オーケストラは…

「日本の虫は元気…」

ブォーン

パパーー！！

ドッドッド

我々日本国民党はあ中韓の内政干渉にい断固抗議するう！！

日本の街中はとても賑やかだ…

以前、ドイツにいる僕の叔父の所で暮らしていた時は、こっちはいかなかった。

「それにしても暑いなあ」

空から容赦なく降り注ぐ太陽光線が地面のアスファルトを極度に加熱させている。それがまた大気を通常よりも上昇させる。

こういう空間にいと、地球温暖化をまさに肌で感じる。

確かCO₂削減を取り決めたキョート議定書のキョートも日本の都市だどこかで聞いたな…

「そんな事より、早くバスに乗らないと…こんなところにずっといたら死んでしまう」

バスの停留所は目の前、すでにバスが止まっていた。

僕は先を急ごうとしたが、残念。日本のバスの仕組みはさっぱり分からない。

あのバスであっているのか不明だ。

日本語は喋れるし読めるが、それでも完璧じゃなかった。

「…聞いてみようかな」

炎天下の中、ちょうど近くを若い女性が通り掛かっていたのでそうすることにした。

「あの、すみません」

「はい？」

女性がこちらを振り向いた。

「 に行くのは、あのバスであっていますか？ 」

微笑みながら尋ねる。

「あ、ええ。そうですよ」

彼女も微笑みながら返してくれた。

綺麗な笑顔。

それを見たらなぜか不快な暑さや騒音も気にならなくなって、心地よい気持ちになった。

「そうですか。ありがとうございます」

笑顔は万国共通だと思った。

そこから5キロ西

佐伯邸

さて、どうしたものか。

俺の目の前には二つの大きな黒い長方形の箱が並んで横たわっている。

じいちゃんの蔵から見つかったのを家の中まで持ってきたものだ。

「ああ…見つけてしまった…」

まだ箱を開けてはいないが、俺にはわかる。この中に入っているであろう物が。

「よいしょっと」

ふと横を見ると、クーが箱に手をかけフタを開けようとしていた。

「ストップ！！！」

「わっ?！」

俺は慌ててクーを箱から引き離れた。

「な、なにをするう！」

クーは抗議の目でこちらを見つめる。

「クー…いいか、…あれはパンドラの箱なんだ」

そうとも。きつとあの箱の中にはクーの時と同じように“誰か”が入っているに違いない！

はっきり言ってこれ以上事態がややこしくなるのはごめんこうむりたい。

と俺は懸念しているのにも関わらず…

「ユキは変なことを言う…あの箱のなかには私に身元に関係する何かがあるのかもしれないんだぞ!」

そういつてクーは箱に向かって飛び込んだ。

「あつ、こら!」

「でいやあ!」

クーが二つの箱を同時に開ける。

「ああ!?!」

俺は見てしまった…あの箱の中身を。

俺の予想では箱に入っているのはあの時と同じく人間だったのだが…

御名答!!

確かにクーと同じく少女がいた。

片方の箱にはクーより背の低いショートヘアの女の子が、

もう片方にはストレートのロングヘアとポニーテールの女の子が二人向かい合って眠っていた。

三人とも西洋人のようだ。

クーの例に漏れずかなりの美少女。

「おお…これは！」

「なんてこった…」クーが目を輝かせながら眠る美少女三人組を見つめている横で、俺は頭を抱えた。

合計四人の身元不明人を引き取らなければならないのだから。

25歳の独身男が背負うにはあまりにも重過ぎる！

というかなんで蔵の中に美少女が四人も保管されてんだ！！

「ほら、起きろ！」

クーが箱の中に眠る美少女の体を揺すって起こそうとしていた。

「ちよっ！何やってんだ！」

「何って、起こそうとしているんだが？」

「駄目！これ以上ややこしくするな！」

「ややこしくって…何を言ってるんだユキ。もう見つけてしまったのに、このまま彼女達を放置しておく訳にはいかないんじゃないか？」

「う…」

「それに彼女達は境遇が私と同じようだ。それなら彼女達はこの一件に関して何か知っているかも知れない」

「むう…」

確かにクーのいうことに道理がある。

というか10歳に言い負かされる俺って…

「…わかったよ」

「うむ。では、ユキ」

「何？」

「彼女達のムネを触れ」

「……」

「はいい?!?!」

喜んでと言いたいところだが。

「なんで?!」

「さっきからこんな近くでユキが怒鳴っても、私が体を揺すっても目を覚まさない。これから察するに彼女達は普通の方法では起きないのだと思う。そこでだ、私と同じようにムネを触れば目を覚ますんじゃないか？」

「いや、しかしだな…その、やっぱり」

「ううん。やはりユキには抵抗があるか、ならば代わって私が」

「いや、やらせていただきます」

俺は再び欲望に負けた。人として負けた。

「ユキ、…行きます！」

俺はゆっくり黄金の右手を伸ばした。

最初の標的…ではなく起こす相手はロングヘアの女の子だ。そして、

俺のゴッドハンドは少女の小高い丘に達した。

「あ、柔らかい…」

至福の快感に包まれる俺の視界に、少女のまぶたが開かれるのが見えた。

目が会つ。

「やあ、おは…」

爽やかな挨拶をかます前に少女の拳が俺の顔面にクリティカルヒットした。

「ぐはあ?!?!」

「ど、どこ触ってんのよ変態い?!?!」

「起きたな私の予測通りだ」

ああ、確かに起きた。俺は永遠の眠りにつきそうだが。
というか軽く脳震盪だ。

「信じらんない!警察、警察ー!!」

「お、俺には救急車を…」

顔面の痛みに耐えながら顔を上げる。

すると…

「ふわぁ…おはようございますう」

ポニーテールの女の子が目を覚ましていた。

「ちょっと、狭いのよ!」

「ふええ?!いきなりそんなこと言われてもお…困るよお」

「その喋り方腹立つわね…もっと普通に喋りなさい!」

「えーん!」

一つの箱の中で騒ぐ彼女達の横で、もう片方の箱からショートヘアの女の子が顔を出していた。

彼女もまた金髪碧眼で、神秘的な深い瞳で俺を見つめていた。

「顔…痛そう…」

そう言つて少女は優しく俺の腫れた顔面を撫でた。まだ横ではポニ
ーテールとロングヘアーが言い争っている。

「いやあ、ユキ。これからは賑やかになりそうだな！」

クーの楽観的な言葉が、右の耳から入って左から抜けていった。

こ 家族（前書き）

ちよつと義妹要素がすくなくないかと

ご 家族

「ちょっと！てゆうかココどこなのよ！」

ロングヘアーが叫び、

「ふえ〜ん、知らない人ばかりだよお」

ポニーテールは涙ぐみながら、

「……………見たことのない場所……………」

ショートヘアーが静かに周りを見渡している。

もう、ホント…何がどうなってんだか…

今日、俺は死んだじいちゃんの倉屋敷を整理していたら、身元不明の金髪碧眼美少女クーと出会った。クーは自分のことは何も知らない、ただ俺を所有者とだけ言った。

なぜクーがあんな所にいたのか、そして彼女は何者なのか、それを
探る為に俺はクーと一緒に倉屋敷を調べることにした。

そこで新たに見つけたもの、

二つの黒い箱、

そしてその中に入っていたもの、

三人の少女、

そう、今俺の目の前にいるロングヘアーとポニーテールとショート
ヘアーの金髪碧眼美少女がそれだ。

「よし、みんな。静かにして私の話を聞いてくれ」

クーが場を取り仕切り始めた。

「な、なによアンタ！」

「ふわあゝ誰えゝ？」

「……………」

突っかかり、疑問、黙視などなど、少女達の様々な反応も意に介さずクーは話を続ける。

「突然なことでもみんな少々混乱していると思うが、まずは各々自己紹介をして欲しい」

「自己紹介ですって?!」

「自己紹介は得意だよ」

「自己紹介。姓名、現所属社会的機関又は団体・法人を他者に説明すること。名刺を渡すことで一連の作業を省くことができる」

ああ、ホントに三者三様だなあ。

「まず名前から言ってもらおうか。ちなみに回答拒否は受け付けないし虚偽の報告は厳しく罰する」

なんかクー、カッコいいな。ていうか尋問みたいになってるぞ。

「なによその態度！何様のつもり？！ていつか名前なんて知らないわよ！！」

「えーっとねえ、私の名前はねえー、えーっとお……ありや？自分の名前がわかんないよお」

「……個別識別IDは……不明……」

「じゃあ、出生地は？」

「知らないわよ」

「お母さんのお腹だよー」

「……病院？」

全滅か！

「クーの時と同じだな……」

「むう……」

俺とクーは頭を抱えた。

彼女達との遭遇はクーの謎、なぜじいちゃんの倉屋敷に美少女が保管されていたかを説明する貴重な手掛かりになると思ったけれど、期待は見事に外れた。

いや、それどころか人数が増えたおかげでさらに謎の重大性が膨らみ事態がややこしくなったと言える。

一体全体、何がどうなってるのか…

なぜ俺はこんな事態に巻き込まれたのだろうか？

もしこの事件にじいちゃんが関わっているのだとしたら、何があったのだろうか？

そしてなぜ、唯一の肉親である俺に話してくれなかったのか？

疑問や謎は膨らむだけだ。

「…よし！」

クーが突然頷いた。

「みんな、私の名前は“クー”！みんなと同じく自分の事は何一つ

わからない。私の横にいるのが“ユキ”私を発見した、私の所有者だ。ちなみにみんなもユキが発見したんだ」

「所有者”……その言葉はなぜか理解できるわ。てか、そんな冴えない男が所有者?!わけわかんないわよ!」

悪かったな。こっちもわけわかんないんだよ。

「ユキさん?よろしくお願いしますう」

「所有者……マイン・フューラー……」

「私はユキの家にお世話になっている。みんなもそうするといい。私達は似た者同士、家族のようなものだ」

「ふん、まあ行くアテもないから、世話になってやらなくともないわよ!」

「わあ、いい、楽しそうだよ」

「家族……集団生活する血縁団体……仲間内で強い結び付きを持つ……」

「そう、私達は家族だ、ふぁみりー！」

…なんか俺抜きでどんどん話がすすんでるんだが。

まず家主である俺に許可を取ってだな…

って、まあいいか。拒否したり警察に引き渡すって言えばまた泣き叫ぶだろうからな。

美少女に囲まれる生活と思えば悪くないじゃないか！

なぜこんなことになったかとかは、また別の日にたっぷり悩めばいい。

「さて、と。話は済んだようだな。それじゃあ…名前、か」

「うむ。私の時と同じように立派な名前をつけてやってくれ！」

「変な名前つけないでよ！」

「じゃあ、まずお前。いつもツンツンしてるから、a n g r yからとって“アン”だ」

「む、由来は気に入らないけどそこそこなネーミングね」

「次は私だよ」

「明るい笑顔が可愛いから…“サン”！（sunny smile：明るい笑顔）」

「わーい 可愛い名前だよ」

「ふん、私の“アン”ほどじゃないわね！」

「で、最後が」

「…最後は…私…」

「冷静だから、“玲”な」

「…玲…」

「よし、これでネーミングは終了！ご苦労だった、ユキ」

まあ、疲れるほどのことはやってないけどな。

さて…これからの生活、どうなるのやら…

そこから50メートル南

まずいなあ…

」
「どうしようっ

道に迷った…

日本の路地裏は狭苦しいし入り組みすぎだ…

もしかしてバスに乗り間違えたとか？

いや、そんなはずは…

でもいくら探しても“佐伯”なんて表札見つからないし…

「こういうのを、途方に暮れるっていうのかな……」

既に日が沈みかけている。

僕は夕暮れの中で一人ぼっちになっていた。

もう、ホント。ちょっと泣きたくなった。

ろく 訪問（前書き）

猛烈な睡魔に襲われるなか書きました。だから変かもしれないです

ろく 訪問

西暦1944年 7月 14日
ドイツ占領地域 ポーランド首都ワルシャワ

「第一期児は成功確率は15%以下で、成功した者も軽度の脳障害や発育障害、人格障害を持つ者が大半でしかも短命でしたが、投与する薬物の革新や調整によって第二期児は問題の65%を解消することができました」

「……………」

「第二期児の基本体力は一般的な成人兵士に相当し、8歳で4キロ走の記録が12分フラットです。ですが情緒不安定で癩癩癖があり著しく学習能力が劣っていた」

「……………」

「第三期児は前二回の問題点を完璧に克服しました。成功率は40

%以上、発育に問題なく学習能力は大学生にひけをとりません。薬物投与によって筋力は通常児童の三倍あり深層催眠により恐怖感を取り除いて絶対的な服従心を植え付けることができた」

「…博士。我々は着せ替え人形を作っているわけではない」

「は…？」

「我々が目的としていることは戦局をひっくり返すような、超人的能力を備えた“新人類”を創造することだ」

「それは、承知しております…」

「ならば、これでは不十分だ。これでは“子供にしては強い子供”に過ぎない、人類の革新にはなり得ない。まったくもって及第点には程遠いな、博士」

「しかし…」

「事態は切迫している。連合軍はノルマンディーに上陸し、パットの戦車師団は今こうしている間にもフランス平原を駆け抜けているんだ。各機関は連合軍を打ち負かす新兵器開発と武器生産に全力

を上げている。分かるか博士、年間数十億マルクの予算を欲しがっているのは貴方だけではないということだ」

「……………」

「持論の“実践的超人理論”を大成させなければ成果をあげる。親衛隊はいつまでもままごとに付き合ってる暇はない」

「わかりました…必ず、必ず成果を上げてご満足させてみますよ、
エインリッヒ・シュトライヒャー大佐」

それから61年後
日本

「ホントにイライラするわね！もっと普通に喋りなさいよ！-」

「うえゝん、無理だよゝだつて癖なんかもゝん」

「なんでそんなフニャフニャした喋り方を癖に持つのよ！さっさと

直しなさい!」

「うう…アンもその怒りっぽい性格直したほうがいいよお」

「言ったわね……よくもアンタみたいなフニヤフニヤ女が!」

「痛いよお! 頬つぺたつねっちゃ駄目だよお! 虐待反対だよお!」

……

「よろしくな、玲。これからは家族だ!」

「……あなたは……」

「クーだよ、クー」

「クー……。……。アンは怒りっぽいから、アン……。サンは明るいから、サン……。私は冷静だから、玲……。クーは……。クーは……。……。クーは、何でクー……?」

「私か? そうだな、私は“蔵”で見つかったからクーだ」

「…クーは蔵だから、クー…。…？…じゃあ、クーは蔵？」

「ん？」

「クーは…物置き部屋なんだ…」

「いや、そういう意味じゃなくて…」

なんか、賑やかになったなあ。

合計四人の身元不明の金髪碧眼美少女か……はあ…

流れて俺が引き取ることにしたが、これどうなんだ？実際の所。

四人の美少女は明らかに西洋人だ、ハーフには見えない。だが、完璧な日本語を扱いきっている。

じいちゃんが教えたのか？それとも日本語学校に通ってた？

いや、きっと違うな。蔵から黒い箱と共に発見されるような子達だ、何か特別な理由だろう。それこそ俺が想像もできないような。

今更になって頭を抱える。

今の自分は普通じゃない、普通の状況じゃない。

はつきり言って警察に任せたいが、クーは俺を信用しきっているようだ。それを裏切るのもツライ、まだ出会って一日もたっていないが…

しかし、ホントに困ったなあ

…どうしよう。

「ほら！普通にあいうえおって言うてみなさい！」

「あゝいゝうゝえゝおゝだよおゝ」

「普通について言ってるでしょー！！」

「ふえゝん、精一杯やってるのにいゝ」

「だから、蔵だからクーなわけではなくて…」

「…じゃあ、なんでクー？」

「それは、蔵から……」

「……やっぱりクーは蔵なんだ……」

「いや、だから……」

人が本気で悩んでるってのにこいつらは！

……

……でもまあ、あんまり悩んでも仕方ないか。

「……そうだよな」

そうとも。こればかりは悩んでも解決する問題じゃない。

うだうだ考えるのはもうやめだ。

割り切ろう！

とりあえず、今日はいろいろあったからそろそろ飯にするか。気分

転換にもちようどいいし。「ようし、飯だ！飯にするぞ！」

俺は雑念を振り切るように声を張り上げた。

「い、いきなり大声出さないでよ！びっくりするじゃない！」

「わゝい ご飯だよお」

「む、もう夕食の時間か」

「…栄養摂取…」

「そこで待ってろ、キッチンで作ってくるから」

そう言ってキッチンに行こうと立ち上がった時だった。

ピンポーン

インターホンが俺を呼ぶ。

「…誰だ？」

俺は宅配便か郵便局が来たのだろっと思って玄関に向かった。

じいちゃん近所付き合いなどしていなかった。近所の人を訪ねて来たという予測はしなかった。

「はいはいどなたさま」

玄関を開けると、俺はそこにいた訪問者に驚いた。

それは、

普段接触することのない人種、

そこにいたのは金髪の男性（女性のようにも見える）外国人だった。

「あ……」

呆気にとられた。

恥ずかしいかな、日本人とは概して異人種との交流に苦手な民族なのだ。

「あ、あの、あ」

我ながらひどくキョドってるな。

とにかく、会話しないと。

「な、ないすとうーみーちゅー！」

出来る限りの中学英語で交信を試みた。

「…サエキ・ユキさんですか？」

日本語喋れるのかよ。

「え？あ、ああ。そうですね…」そう返した時だった。

目の前にいる外国人の蒼い瞳が涙でウルウルになった。

「え？！どうし」

女性みたいな整った綺麗な顔立ちが泣きそうになったのを見てひどく焦った、そして…

「ああ、逢いたかったあ!!」

思いつきり抱き付かれた。

「ちよつ、はあ?!」

突然の出来事に混乱する。

抱き付いてきた外国人は涙声で喋り出す。

「貴方の家を探していたら、ろ、路地裏で迷っちゃって…それで3時間くらい迷っちゃって、気がついたら日も暮れて、真っ暗になつてきて…」

「あの…とりあえず離れてもらえます?」

ちよつと苦しい。

「ふえ?…あ!す、すいません、つい…」

その外国人は慌てて俺から離れる。まだ涙目だった。

女顔だが背は俺より少し高い。さすが外国人。ちなみに抱き付かれた時の感触で男だと確信した。

「ええっと…俺に何か用があるんですかね？」

外国人は落ち着きを取り戻して話し出す。

「ええ、実は…」

が、しかし、その時。

「わぁーん、お腹へったよぉ！」

「あーもー！いちいちうるさいわね！我慢しなさいよ！」

家の奥から聞き苦しい声が響いてきた。

（あいつら…）

客人に聞かせるようなものではなかったのだが、それを聞いた訪問

者である外国人の顔からは微笑みがこぼれていた。

もう涙目ではない。

「そうか。……“彼女達”は元気なんですね」

「…は？」

ちょっと待て、今の“彼女達”ってのはどついう意味だ？

もしかして

「ああ、先に名前を名乗っておきますね。

僕の名前はアシュレイ、

アシュレイ・シュトライヒャーです。よろしく」

なな 経緯（前書き）

今回はいろいろと長いかもです

なな 経緯

その訪問者は“アシュレイ・シュトライヒャー”と名乗った。

背は俺より高く178cmくらいといったところで、男にしては長い髪の毛は金色だった。

外人のくせに日本語は流暢で、背は高くせに女顔。

声も少し高い。

しかもいきなり抱き付いてくるというチグハグな野郎だ。

だが、それでも分かる。こいつは俺にとって……いや、

今回の事件にとって重要なキーパーソンであると！

俺はその外人　アシュレイとじっくり話をするために家に招き入れた。

今、アシュレイと俺は和室で机をはさんで向かい合っている。

しかし、外人と和室とは実にミスマッチだ。

外人であるアシュレイには和室がめずらしいのか、部屋中をキョロ

キヨロと見渡している。そのわりにはきちんと正座をして座ってるじゃないか。

少しは日本の教養があるらしい。まあ、日本語が喋れるくらいだからな。

さて、そんなことは一旦横に置いてじっくりとこいつの話を聞こうじゃないか。

と、そう思ってたアシュレイに向き直った時だった。

さっきまで落ち着きなくキヨロキヨロしていたアシュレイが俺の方をじっと見つめていたのだ。

そして母性に満ちた優しい笑顔で手を振りはじめた。

俺は“なにやってんだ？”と疑問に思ったが、次の瞬間ハッとして後を振り向いた。

そこには和室の入口でこちらに視線を向けているクーとアンとサンと玲がいた。

アシュレイの手振りに無表情に応じて手を振っている玲を除いて、その眼差しには明らかな抗議の念がやどっていた。

ちょっと異様な雰囲気だ。

「ユキ…彼は、客人か？」

クーがアシュレイに視線を送りながら尋ねてきた。

ちなみにアシュレイはまだ満面の笑顔で手を振っている。

「ああ、まあ、そうだけど」

俺はクーの質問に答える。

「そうか……。確かに、客人をもてなすのは主として当然だ、
だがな……」

夕飯はいつ作るのだ!？」

あー…、確かそうだったっけ？

ちょうどキッチンで飯作ろうとした時にアシュレイが訪ねてきたんだっただな。

「後でな。こっちの用事が終わったら作るよ」

「後でと言っても!こちらの我慢にも限界というものがあるのだが

「！」

「そうよ！すでにお腹の虫が鳴いてるんだからね！さっさと作りなさいよ！」

「お腹すいたよぉ～！死んじゃうよぉ～！」

いちいちうるさいやつらだな…

俺は手っ取り早く騒ぎを沈静化させるために入口の扉を勢いよく閉めてちかくにあった亡きじいちゃんの杖をつつかえ棒に利用して扉を開けられないように固定した。

扉の向こうでクー達が

「ユキの横暴に断固抗議する！」

とか

「アンタ地獄に落ちるわよ！」

とか言ってるが軽く無視だ。

さて、と今度こそじっくりと話を聞かせてもらおう。

そう思ってアシュレイの方に振り向いた。

「やっぱり、子供ってのはあれくらい元気な方が可愛いですねえ」

そう言つてアシュレイは無邪気な笑顔を浮かべる。こいつも子供っぽい。

「そんなことよりも、アシュレイさん、さっきのは一体なんなんだろう？」

「さっきのつて？なんですか？」

「ほら、玄関先のことだよ。アンタ、クー達…あの子達の声を聞いて“彼女達は元気なんですね”って言っただろ」

「ああ、あれですか」

「あの子達について何か知ってる風な言い方だったな。もし、あの子達について知ってることがあれば俺に教えて欲しい」

「…ユキさんは何も知らないんですか？」

「全然知らないし、あの子達も自分自身のことは何も知らなかった」

「そうですか…おじいさんから教えてもらってないんですね？」

「じいちゃん?! やっぱりじいちゃんも関係してるのか?!」

俺は身を乗り出す。興奮している俺をよそに、アシュレイは冷静に話し始めた。

「わかりました、一から全てお話ししましょう。なぜ彼女達が貴方のもとにいるのか、なぜ僕が貴方を訪ねにきたのか、そして貴方のおじさんがどう関係しているかも、全て。貴方にはそれを知る権利がありますしね。すこし長くなりますけど、いいですか?」

「ああ、いいとも」

さっきまで興奮していた俺の気持ちも失せて、淡々と、そして緊張しながらアシュレイの一言一言に注意深く耳を傾けることにした。

「話は半世紀以上前に遡ります……」

“ナチス”を御存知ですよ?

正式名称“国家社会主義ドイツ労働者党”
ドイツ語の頭文字を取って“ナチス”

アドルフ・ヒトラーを指導者とする急進的な右派政党でした。

知つての通りナチスはドイツで政権を握つたあと、“全権委任法”により他政党を解散させ独裁体制を敷きます。

そして再軍備、ラインラント進駐を強行し、1939年にドイツ軍のポーランド侵攻をきっかけに第二次大戦が起こった…

ここまでならどの歴史教科書にも載ってますよね？

でも、ナチスの“ある一面”はあまり多くの人には知られていない。

ナチスのある一面？

ええ、アーリア主義です。

伝説のアトランティスを起源に持つ今は廃れた神の血を引く北方民族“アーリア人”

そのアーリア人の末裔であるとされるゲルマン民族のナチスは、現代に神の民族であるアーリア人を復活させようとしたんです。自分達が“神の血”を手に入れる為に、ね。

アーリア人ねえ…うそくさいなあ

実際には存在しませんから、彼等は人工的に造ることにしたんです。

造る？

単刀直入に言えば優秀なアーリア人に近づけるために人類を人工的に“進化”させようとしたんです。

そしてそんな時に一人の博士が現れた。

ハンス・ニーンベルグ、

薬物投与や外部的ショックによって人間を“強化”させる“実践的超人理論”を唱えていた人物です。

ナチスは彼の実践的超人理論こそ人類の進化の方法だと考え、彼の理論を採用しました。

…それは、進化なのか？

いいえ。実際には単なるドーピングでした。

でも、ナチスにはどうでもよかったんです。

ナチスはニンベルグ博士をトップに置いた研究グループを編成して、アーリア人を作り出す計画を推進しました。

秘匿作戦名“生命の泉”
レーベン・スボルン

そして計画遂行の為に設立されたのが“生命の泉機関”

話の核心はここからです。

当初、優秀な人間を作るはずだった計画も、戦況が悪化するにつれて強い人間を作ることに目的が変更された。

新兵器として投入し、戦局をひっくり返すつもりだったんでしょう。ですが思うように成果はでず、ナチスは追い詰められていく……

ようやく敗戦間近の1945年に入って満足の行く兵士が“作られました”

でも、手遅れでした。

製造された“アーリア人”300余名のうちほとんどがソ連軍が迫るベルリンへ投入され、残りの十数人が潜水艦に乗せて同盟国日本に引き渡すことになったんです。

その引き渡し計画を立てたのが僕の祖父であるレオ・シュトライヒヤーと貴方の祖父、佐伯俊夫だった。

俺のじいちゃんが？！

そう、僕の祖父と貴方の祖父がジュネーブで秘密裡に会合し、計画した。

そして僕の祖父は三兄弟で、長男であり生命の泉作戦を指揮していたエインリッヒ・シュトライヒャーが許可を出し、次男のフォン・シュトライヒャーが実際に潜水艦に乗って輸送作戦に加わった。

ですが、輸送作戦は失敗に終わり潜水艦はインド洋沖に沈没した。

そして戦争は終わり、僕の祖父の兄弟、長男エインリッヒは戦犯として処刑され、次男フォンは既にベルリン戦で戦死していた。生き残ったのは僕の祖父のレオだけでした。

僕の祖父と貴方の祖父は戦後も度々会ってはどうかしてインド洋に沈んだ潜水艦から“例の積み荷”引き上げられないかと話し合っていました。敗戦国としての意地だったのでしょうかね。

そして、貴方の祖父は戦後に築き上げた莫大な資産（この広い邸宅もその一つでしょ？）を投じてそれを実現させた。

貴方の祖父は引き上げた積み荷を僕の祖父に引き渡そうとしましたが祖父は拒否しました。保管する場所がないのと元々日本に引き渡す目的だったからというのがその理由です。

何か問題があったら協力すると約束していたので、貴方の祖父が亡くなったという“問題”が生じたので僕がやってきました。

以上でアシュレイおにさんの説明は終わり です」

話が唐突に打ち切られ、俺の体から力が抜けた。

まだ頭の中は少し混乱してる。

「ええと、つまり…あの子達はアンタの話に出てくる人工的に作られたアーリア人なのか？」

「そのとおり、正確に言えば強化兵ですね」

「あんな子どもが？」

「投与される薬物の性質上、被検体は子どもであることが望ましかったですから」

「アンタの話が本当なら、60年もたってるのにあの子達は年をとってないが？」

「そこはほら、強化人間ですもの」

「はあ……。あのな、そんなナチスやら実践的超人理論やら強化兵やら漫画みたいな話を信じるってのか？」

あまりにも話がぶっ飛び過ぎている。普通の人間なら疑って当然だ。

「僕の話を通じてくれないんですか？」

「当たり前だ！こっちはな、朝から身元不明の子ども四人を引き取ってそれどころじゃないんだよ！だいたいどーやってお前は俺のじいちゃんが死んだのを知ったんだ！？」「それは貴方の祖父の弁護士との……」

そうアシュレイが喋り始めた時だった。

壁を一枚隔てた向こうのリビングからサンの悲鳴が飛び込んできた。

「うわぁーん！！ゴブリだよぉー！！苦手だよぉー！！」

「任せろ、サン！その黒い悪魔、クーが退治してくれる！」

どうやら例の害虫が現れたようだ。俺はアシュレイの話を馬鹿馬鹿しくおもったのでゴキブリ退治に参加しようと思い立ち畳みから腰

をあげようとした。

その時、アシュレイが話し掛けてきた。

「ユキさん、強化兵は強いから強化兵なんですよ?」

「は?」

俺がアシュレイが突然言った言葉を理解しきれず間の抜けた返事をしたその刹那だった。

「スペシャルジェットストリームキック!」

ドゴォ!!!

クーの叫び声と同時に家全体が衝撃に包まれ、俺の背後にある和室とリビングを隔てる分厚い壁が入口のドアごと派手に吹き飛んだ。

吹き飛ぶドア、砕け散る壁、俺の後頭部にクリーンヒットする壁の残骸。

俺は目の前の机に倒れ伏した。

後頭部への衝撃がひどかったようで、意識が朦朧としている。

「ね？言ったでしょ、あの子達は強化兵だって」

…これはクーの仕業なのか？

ああ、お前は嘘なんかついてなかったんだな…こんなもん人間技じゃない

「ぎゃー！…ちょっとクー！壁ごと壊してどうすんのよ！」

「しまった、力が強すぎた！しかもユキが巻き添えをくってるではないか！」

薄れゆく意識と後ろから聞こえるクー達の悲鳴のなか、俺は壁の修繕費に想いを馳せて静かに目を閉じた。

なな 経緯（後書き）

ちなみに“生命の泉機関”は実際に存在していた組織です。

はち 翌朝（前書き）

更新が遅いです。忙しいんです。

はち 翌朝

深い眠りの底から、少しづつ意識が浮かび上がっていく。

まぶたがゆっくり開き、朝日が眼球に染みた。

朝だ。

ん？寝てたのか、俺。

さえずる小鳥の鳴き声に心地よい薄い布団の温かさ。

頭がまだ覚醒しきっていないまま俺は上半身を起こした。

「……」

ふと視線を落とすと俺はパジャマを着ていなかった。いつもなら着ているのだが…

「うーん…昨日なんかあったんだっけ？」

まだ寝ぼけてるせいなのか、かなり記憶が曖昧ではっきりと思い出

せない。

ただ、昨日はとても大変だったような気がする。

なんか、いろんな人が来て、いろんなことがあったような…

ああ、やっぱり思い出せない。

（まあいいや…とりあえずキッチンでなんか飲もう…）

そう思い立って俺は立ち上がり部屋を出て、廊下を挟んで向かい側にあるキッチンルームのドアを開いた。

その瞬間、俺は目を細めた。

キッチンに先客がいたのだ。

ここは確かじいちゃんの邸宅で、そのじいちゃんはずいこの間死んで今は俺一人だけの筈。

先客は可愛いげな鼻歌を歌いながら陽気に朝ご飯でも作っているようだった。

ちょっと長めの金髪を後ろで括り、スレンダーな線の細い体にエプロンをまとっている。背は俺より少し高め。

整った綺麗な顔立ち。

(…俺に彼女なんていたっけ?)

そう思つて首をひねっていると、金髪の先客がこちらに気付いて振り向いた。

「あ、ユキさん。起きたんですね、おはようございます」

爽やかな笑顔だが、誰だか思い出せない。

俺は少しづつ前に歩を進めた。

徐々に“先客”に近づく。フライパンを片手に持った“先客”はそんな俺に嬉しそうに話し掛けて来た。

「勝手に冷蔵庫の食材使わせて貰いました。今朝の朝食はハンバーガにしようと思っただですよ。で、今は具のハンバーグを焼いてるんです。僕、ハンバーグ作るのは結構得意なんですよ?」

無邪気な笑顔で話すのを無視して、俺はなんとなく“先客”のひらべったい胸をわしづかみにした。

いきなりの行動に“先客”はビククリして、危うく自慢のハンバーグをフローリングの床に落としそうになった

「なっ…?! い、いきなりなにするんですかあ?!?!」

赤面し、アタフタ慌てながら怒り出す“先客”

「いや、女かどうか確かめようと思って…」

「お、男ですよ!」

確かに、この感触は男だ

「あー、そっか…」

「…あの、ユキさん。もしかして寝ぼけてます?」

「…うん、多分…」

「どつりで昨日と雰囲気が違うと思ったら…今度からはこついつのはやめてくださいね、例え寝ぼけてても。セクハラですから…」

セクハラって…

男なのに女みたいなやつだな。

「…ところでさ」

「何です？てか胸から手を離して下さい」

「…アンタ、誰？」

「…へ？」

「だから、アンタ誰？」

「覚えてないんですか？！昨日自己紹介したじゃないですか！」

「思い出せない…」

「（まさか、昨日の打撲で記憶が…？）」

「昨日なんかあったのか？」

「…ごめんなさい。先に謝るときです」

「は？」

いきなり謝られても…てかなんで謝るの？と、ぽかーんとしていた俺をよそに“先客”は手に持っていたフライパンからハンバーグを皿に移した。

そして空になったフライパンを俺に向かって大きく振りかぶって…

「っえい！！」

ガン！！

「い?!?!」

俺の頭を思いっきり叩いた。

寝ぼけてたこともあってまったく回避モーションをまったくとれなかった俺の脳天にフライパンがクリティカルヒットする。

鈍い痛みが脳内を掻き乱し、記憶の保管庫を乱雑に荒らした。

意識を失いかけた俺の視界に昨日の映像が断片的に映し出される。

倉で見つけた金髪碧眼美少女。

クーのおっぱいのやわらかさ。

そして吹き飛ぶ我が家の壁……

「ショック療法です！どうですユキさん、思い出しましたか？」

「ああ、思い出したよアシュレイ……だがな、他にも方法つてもんが……」

俺があまりの痛さにうずくまっていると、アシュレイがあっけらかんと答えた。

「すみません、でも思い出したからよかったじゃないですか」

あまりの痛さにうずくまっていなければ、こいつを殴り倒してやるところなのだが……

「覚えとけよ…」

「そんなことよりユキさん。もうすぐで朝ごはんができますから、クーちゃん達を起こしてきてください」

「人がこんなに痛がってるのに……ん？クー達もいるのか？」

「そりゃそうですよ。彼女達、ここに住んでるんでしょ？ユキさんがのびてる間に僕が寝かしつけておきました」

「あー、そうか。ご苦労様」

「じゃあ、クーちゃん達はとなりの部屋で寝てますから」

「わかった…」

俺は痛む頭頂部を抑えながら、ゆっくりとした足取りでとなりの部屋に向かった。

視界の端に昨日クーが盛大に破壊した壁が見える。あの後アシレイが掃除したのだろうか、壁の残骸はキレイサッパリ片付けられて今はデカい穴が開いてるだけだ。

（ああ、やっぱり昨日の出来事は夢じゃないんだよなあ）

これからあの、アシユレイ言うところの“ナチスが開発した戦闘用強化人間”四人衆との生活が始まるわけだが、

はつきり言って現実感がないというか、不安というか…ともかく俺の生活環境が激変したことに戸惑いがないといえば嘘になる。

（これからどうなるんだろう？なるようになるしかないけどさ…）

そうこうしている間に、クー達が寝ている部屋の前に着いた。今から起こすのに、クー達の睡眠を阻害しないようにゆっくりとドアを開ける。

開いたドアの先には、薄ぐらい部屋に敷かれた毛布に寄り添って眠る四人の少女の姿が見えた。

小動物みたいでかわいいなあ。

「おい、起きろ！朝だぞー」

俺は結構大きな声をあげながら開いたドアをコンコンと叩いた。

んが、誰も起きない。

「起ーきーろ！！」

今度はさっきより大きな声を出した。んが、またしても誰も起きない。

「…結構ツワモノだな」

なかなか起きないので直接体を揺すっておこそうと思い、俺は寝ているクー達に近づいた。

が、近くで見る彼女達は思った以上にかわいらしい。

スースーと寝息をたてている姿など殺人モノだ。

よく見てみると、四人のなかでは一番性格がキツイアンが胸も一番大きかった。

無論、少女にしてはの大きさがなかなか魅力だ。特にシャツの上からでも分かるふつくらふくらんだ二つの胸にツンとかわいらしく付いている突起物などなんともみりよ…

おっと！なんだかエロ小説っぽくなってきたからこれくらいにしておこつ。

「おい、起きろ」

体を揺すってみるが誰も起きない。

「起きてくれー」

やっぱり誰も起きない。

「ここまで起きないと異常だな……」

その時、俺は昨日のことを思い出した。

確か昨日、アン達を見つけた時も眠ってて、横でクーとデカい声でやりとりをしていても起きなかったな。

そこでクーが言ったんだっけ？

私の時のように胸を触れば起きるんじゃないか？

……

ふと、俺は右手をふっくらしたアンの胸に延ばしていた。

.....

いやいやいやいやいや、アレですよ？アンを起こすためですよ？

だって普通にやっても起きないんだもん。こつするしかないじゃないですか？

決しておっぱいを触りたいからとか、昨日のクーとアンのおっぱいの感触が忘れられないからとかじゃないですからね？だからPTAのみなさん、その目つきやめてください。

うん、じゃあ、いきますか。

そして俺は“アンを深い眠りから覚ます”為、アンの胸に手をかける。

そう、まるで眠れる森のお姫様にキスをしようとする王子様のよう

に
「朝っぱらからなんともご苦労様ね」

「ええ、そりゃもう。朝からこんなかわいいおっぱい………ん？」

どこからともなく聞こえた声に、視線を上げるとそこには顔を真っ赤にしてぶるぶる震えるアンの顔があった。

なんかどこかで見たパターン…

「ほんつつつとぉーに、ご苦労ー様よね」

アンは鬼の形相。

俺がそんなアンに青ざめていると、いつの間にか目をさましていたクー達が言った。

「ユキ、いくらなんでも寝ている少女にそんな真似をするのはいただけないな…」

「いくらなんでも犯罪だよぉー？」

「……少し、軽蔑……」

降り注ぐ非難の眼差し。そんな目でおにいちゃんを見ないでください。

「い、いや違うんだ！これは宇宙人からの命令で」

「っ死ぬ！！」

「ぐおっ?!」

俺の弁明むなしく、アンの膝蹴りが俺のみぞおちにブチ込まれた。

痛みあまり床に突っ伏す俺を踏み台にしながらアンは部屋から出て行った。

「次やったら首が一回転できるようにしてやるからね!!」

…恐ろしい子。

「ユキ。次からは事前に承諾を得た方がいいと思う」

「アンは怒りんぼだもんねえ」

そう言ってクーとサンも部屋を出て行った。痛みで悶える俺をほっといて。

俺は一人ぼっちですか？

ただ、玲だけがしゃがみこんで俺をジーっと眺めている。

「……痛い？」

「うん……とっても……」

「……ユキは、痛い……」

「死んじやいそうだよ……」

「……天罰だね……」

「……そうだね」

痛みのあまり頬から垂れた一筋の涙が、床にぽつりと落ちた。

きゅう 勉強（前書き）

かなりひさしぶりの更新です。

小説内ではまだ夏ですので、ご注意ください。

きゆう 勉強

縁側に座った自分の足元が、太陽の光にさらされている。

熱気を吹き飛ばすには少々頼りないそよ風が風鈴を優しく揺らして、チリンというか細い鳴き声が鳴った。

「今日も暑いな・・・」

時刻は朝の11時。そろそろ地面が日光によって熱せられて来た頃だろう。

不快な熱気が陽炎に揺らぎながら空間を満たしていた。

気温はきつと30度を越しているだろう。そんな日だと言うのに、垣根の向こうから子供達が鬼ごっこに興じる笑い声が聞こえてくる。

「子供っていうのは、元気ですね」

そう言って、我が家の（知らないうちに）新たな住人となった金髪碧眼の、見るからにゲルマン人の素養を満たしているドイツからの来訪者、アシュレイが縁側に腰掛ける俺の横に、寄り添うように座った。

その腕の中には芋羊羹と麦茶を載せたお盆が抱えられている。

「お茶に羊羹とは…西洋人とは思えない差し入れだな」

「日本に来る前に、日本の作法をちょっと勉強してきましたから」

これが作法のうちに入るかどうかは微妙なところだった。

「ところで、日本は暑いですねえ」

そう言って苦笑いを浮かべるアシュレイ。

しかし、その端正な横顔には汗の一粒も浮かんでいなかった。

「…暑いならもうちょっと離れる。こっちに寄り過ぎだ」

ちよつと動けば腕と腕が触れ合うような距離だった。

お盆はいまだアシュレイの腕に抱かれている。

「えー、別にいいじゃないですかあ」

「お前はまだ日本人と言うものを分かっていない。親しくも無い相手にこんな近くに寄られたら、誰だって落ち着かないんだよ。それから、お盆はちゃんと床に置け」

そうなんですか？と男にしてはふぬけな声を上げ、アシュレイは俺から少し距離を開け、その間にお盆を置いた。

これっくらいは事前に調べなくても分かるものだろうと思うが…

「そっちいった！」

垣根の向こうから、子供の叫び声が聞こえた。

その後に続くワーやらキヤーなどの阿鼻叫喚。

どうやら向こうで進行中の鬼ごっこに、決定的な大どんでん返しがあつたようだ。

「楽しそうですね」

アシュレイの優しい笑顔。

どこことなく母性に満ち溢れいるように見えた。

「…そう言えば、こっちの子供達はとうした？」

ふと思つて、他に話すことも無かったので口にしてみた。

こっちの子供というのは言うまでもない。

昨日、じいちゃんの蔵から出土した四人の「美少女」達のことだ。

「ああ、ちゃんと同じで「お勉強中」ですよ」

そう言つてアシュレイは居間のほうを親指で指し示した。

その導きに従い、俺も顔を振り向ける。

たしかに、居間の方にクーとアンと怜とサンが、俺の愛用のパソコンに張り付いていた。

みんな真剣な目でディスプレイを見つめている。

「さっきからずっとあの調子です」

クー達がパソコンに張り付いているのは、文字通り「勉強」の為だ。

彼女らが誕生したのは居間から半世紀以上前、第二次大戦真っ只中のドイツだった。

ヒトラー総統の特命を受けた「生命の泉」^{レーベンスボルン}とかいう特殊機関が薬物投与とアナログ・遺伝子技術によって作り出した「新人類」が、彼女、クー達らしい。

そして敗戦間近にアシュレイの祖父が日本へクー達を潜水艦を使って日本に脱出させる作戦を立て、その作戦の日本側協力者が俺のじいちゃん　佐伯俊夫だったらしい。

作戦は失敗に終わったけど、終戦後にじいちゃんが密かに沈没した潜水艦から、冬眠状態だったクー達を引き上げ、あの蔵に保管していた…そしてそれを俺が見つけて、クー達を（胸を揉むことによって）冬眠から覚ましてしまった。これがおおよその経緯だ。

つまり、ドイツ脱出から俺が蔵から見つけ出すまでの半世紀以上、クー達は冬眠していたわけであり、その間の時代感覚がごっそり抜けているわけだ。

だから、今、クー達はパソコンのインターネットを使って今の世界の現状を学習し、その時代感覚の穴を埋めようとしている。

「でも、さっき誰がマウスを操作するかで言い争ってましたよ」

どうやらちようどいいおもちゃを見つけてしまったらしい。アレは仕事で使うんだけどな・・・

でもまあ、夢中になっている子供を見るのも、結構悪くない。

今まで独り身だっただけに、同居人が増えることへの嫌悪感もあったが、にぎやかな日常に対する喜びもあった。

まだ同居一日目だが早くも幸せ感が胸に溜まりだしている。

よく家の前で子供と一緒にキャッチボールをしているおじさんの楽しみも、今なら理解できる。

「それじゃ、ちょっと様子を見てくる」

そう言つて腰を上げて、ディスプレイを覗き込むクー達に後ろから近寄つた。

クー達はディスプレイに夢中で、こちらに気づきもしない。

そんな彼女らが子供っぽくて可愛らしかった。

そして、どんな内容を勉強しているのかと、後ろからディスプレイを覗き込む。

「おい、どんなページ見て・・・」

ディスプレイには「ブルマ女子高生！青い果実の誘惑」の文字。

「コラぁー！！！！」

おそらく、今までの人生で一番大きな叫び声だった。

マウスを取り上げディスプレイを大慌て閉じる。

「何をするう！せっかく学習中だったのに！」

「そんなもんは保健の教科書でやれ！俺のPCに変な履歴を残すな！！」

俺はパソコンからクー達を払いのけた。心臓がバクバクしている。

そんな俺をアンがすこし軽蔑の眼差しのこもった目で見つめている。

「変な履歴って…お気に入りに登録してあったアドレスから飛んだんだけど」

いかにも、アレは俺が毎日お世話になっている画像サイトだ。

あのサイトに置いてある画像で、俺が見たことの無いものは無い、と言えるほど使い込んでいる。

「と、とにかく！しばらくはお前らにPCは使わせない！！」

顔を真っ赤にして憤怒する俺に向かって、怜が静かに口を開いた。

「女子高生うれしはずかし画像女子高生スク水画像女子高生課外授業画像女子高生電車内痴漢画……」

「俺の履歴を読み上げるなあ！！！！！！」

もうこいつらには出て行って欲しいと思った夏の昼下がりだった。

じゅう 罫(前書き)

やっと更新できました…

じゅう 罫

2006年 9月 1日

フィリピン首都マニラ ホテル・アチエロ

P P P P P P . . . P P P P P P . . . ガチャ

「あー…もしもし？」

『キュフナー・テオ様、国際回線からお電話です』

「…つないでくれ」

『かしこまりました』

「……もしもし？」

『テオか？ブルーノだ』

「あー、お前か…久しぶり…わざわざパラグアイから何のようだ」

『…眠たそうだな』

「当たり前だ。そっちは昼だろうがこっちは夜だぞ、時差を考えると、何のようで電話をしてきたんだ？」

『事態に進展があった』

「！？U - 158が見つかったのか？」

『ああ、仲間の調査船がようやく発見したよ。発見位置はインド洋スマトラ沖合い、ベナンまで100キロ地点の海底だ。船体は酷く損傷して内部は浸水はしていたが、無事だったらしい。潜水したダイバーがいくつかの遺品を回収したよ』

「で、あれは？」彼女達”はみつけたのか？」

『いや、黒い箱だけはこっそり無くなっていた』

「……………先を越された？」

『どつやらそのようだな』

「なんてこった！クソ、今までの努力は無駄だったのか！一体このどいつがネコババしゃがったんだ？！アメリカか？イギリス？それともソ連か？！」

『いや、”日本”だ』

「……………？！」

『その後の調査で、あの海域付近に以前”不自然”なサルベージ作業をしていた日本の調査船が目撃されていたことが分かった。詳しく調べてみると、調査船の名前は福龍丸。旧日本軍沈没船からの遺骨・遺品回収を目的に派遣されたらしいが、この船を出したのが日本の”旧日本海軍遺品返還機構”とかいう団体だ。だがな、この団体がどうやら一癖も二癖もある連中だったらしいぞ』

「いったいどういふ奴らなんだ？」

『こいつらは、U - 158が沈没していたインド洋に過去10回以上も調査船を派遣している。日本軍の沈没船なら、インド洋よりも太平洋のほうが遥かに多いはずなのにだ。この団体は他にもいくつかの地域で遺骨・遺品回収のために活動していたらしいが、どれもこれも実態の無い活動で、まるで唯の”アリバイ作り”だった』

「なるほど、まるで端からU - 158にしか興味がなかったみたいだな」

『十中八九そうだろう。この団体はU - 158沈没地点付近でサルベージを行った直後、突然団体を解体している。この団体に関する資料はほとんど残ってないみたいだ』

「不自然すぎる」

『全くな。だが、残った数少ない資料から決定的な情報を見つけたよ』

「なんだ？」

『この”旧日本海軍遺品返還機構”って団体の設立に、日本の”佐伯重工”という大会社が多額の資金援助を行っている。それでだ、この”佐伯重工”って会社の社長の名前が、サエキ・トシオ…つまり』

「引渡し計画の日本側手配者か！」

『そうだ。これで決まりだ、この男が、そしてこの男が糸を引いてた”旧日本海軍遺品返還機構”が、U-158を俺達より先に発見し、そして”アレ”を回収した。「日本海軍の遺品回収」なんて、只の言い訳で、自分達が”アレ”を狙ってることがばれないようにするためだったんだ』

「だとすると、”彼女達”は今日本にいろのか？」

『そういうことになる。既に回収要員を派遣している。先発はもう日本入りしているはずだ。後発が時期に出発する』

「……」

『そこで、だ。これからが、今日お前に電話した理由だ。今回の”仕事”はかなり大規模になる可能性がある。だから、人員の輸送はこちらでなんとかするが、物資の輸送はどうにもならん。あれは税関を通るような代物ではないのでな。そこで……』

「俺がなんとかしろってか」

『そうだ。物資をそちらで調達して、密輸業者を利用し日本に移送してほしい。金を振り込む』

「…わかった。で、何時までにだ」

『詳細はメールで送る。だが、結構な大荷物になるぞ、覚悟しておいてくれ』

5時間前

極東 日本

「ユキ、とりあえず聞いて欲しい」

「…なんだ」

「これをどう思っ？」

クーの両腕には、有名な教育テレビ「森の昼下がり」に登場する牛を真似た人気キャラクター”モツ君”のぬいぐるみが抱かれていた。

「このつぶらな瞳、抱くもの全てを安楽の裾野へと誘うこの毛並み、そして、何よりも、後頭部を押すと投げかける「こんにちは」という優しい声……」

ユキよ！まさしくこの”モツ君ぬいぐるみ”は、至高の一品だと思わんか!?!」

「いいえ、思いません」

「買ってくれ!!」

「いいえ、買いません」

今俺は、クーと怜と一緒に近くのショッピングモールにやって来ている。

じいちゃんの蔵から出土したクー達の服を買ったためだ。

クー達は60年も前の西洋服を着ていたので、街角をあれで歩いては嫌でも注目を引く。だからカジュアルな現代風の服を買いに来た

のだが…

「そんな！こんなに素晴らしいぬいぐるみを買わないとは、ユキの神経を疑わざるおえないな！！」

さつきからこの有様だった。服屋のまん前にあるぬいぐるみ屋で足止めをくらってる。

「今日は服を買いに来たんだろうが…」

と言っても、クーはモツ君ぬいぐるみを手放そうとはしない。

このモツ君とやらは、自分には理解できないが何故か子供達の間でやたらと人気がある。

主に幼稚園児から小学生の間で、毎年「結婚したいキャラクターNo1」やら「抱かれない男No1」やらにランクインしているほどだ。今年は劇場版も製作されるらしく、ブームの火は今後もしばらくやみそうにない。

ただ、俺達大人にとって問題なのは、巷に溢れるこのモツ君キャラクターグッズが、無垢な子供の純真な心を惑わし、その保護者達から毎年10億以上のカネを巻き上げ続けているということだ。

そしてその”モツ君商法”に目の前のクーが見事にはまっている。

「こんなにカワイイのに…」

「駄目なのは駄目なんだ」

「モツ君もユキの家に来たいよーって言うてる」

「言っていない」

「『モツ君もユキ君の家にいきたいよー』」

「うっせーくん」

「もーさつきからなんだユキは！とにかく、私はユキが買
うと言うまでここを動かないぞ！！」

「何歳児だお前は…」

「モツ君！必ず私が我が家に連れて行ってやるからな！！」

この子は、そのモツ君ぬいぐるみの値札に描かれている14500

円という文字が見えないのだろうか…結構高いんだぞ。

というか、なぜぬいぐるみ程度であんな値段なんだ。子供向けビジネスというのは理解し難い。

「あんな、クー。そのぬいぐるみは、子供から身銭を巻き上げる利益追求主義のカタマリであってだな」

クーについて現代の商業主義の汚い一面を説明しようとした時、俺の腕を誰かがクイクイと引っ張ってきた。

振り向くと、そこにいたのは怜。さっきから俺が、モツ君ぬいぐるみの魔力にとり付かれたクーを相手にしている間、ほったらかしにしていた。

怜ならおとなしいから、問題を起こさないだろうと思っていたのだ。

実際、怜はあの少女達の中で一番無口で冷静な（そしてちょっと暗い）子だった。

アンみたいに怒りっぽくないし、サンみたいにポワーンとしていない。

そして目の前のクーみたいに、簡単に世の中の甘い誘惑には引っつかからない性格だろうと、そう思っていた。

「……ユキ」

「ああ、怜。ごめん、すぐ終わるからもうちょっとそこで待っててくれる…」

その時、怜が両腕で持っていた大きな買い物カゴに目が行った。というよりは、その買い物カゴに入っている物に、と言うべきか。

「怜…それ…何かな」

「…モツ君キーホルダー三点モツ君消しゴム五点モツ君手袋6ペアデラックスモツ君人形一点おつかいモツ君メモ帳二点モツ君スリッパ三点モツ君消臭液3…」

「返して来なさい」

「…ユキ…多分…モツ君のいる”森の村”が財政危機に陥っているのだと思う…だから…こうやってモツ君グッズでお金を集めて…財政危機を乗り越えようと…頑張ってる…だから…私達もこれを買って…”森の村”を助けて…」

「返してこい」

「……」

その後、約一時間かけて二人をモツ君の呪縛から解き放った。
(もっとも、小さなモツ君人形を二人に一つずつ買うはめになった
が)

じゅういち 心配（前書き）

眠たい中書いたので、すこし文が変かもしれません

じゅういち 心配

日本で言うアニメ（Anime）とは国内外問わずアニメーション作品全般のことを言う。

しかし、ひとたび国外、とくに欧米にいくとアニメと言う言葉は、日本製のアニメ、あるいは”日本製風”のアニメのこのみを指す。もともとアニメ（Anime）という言葉が和製英語であること、アニメーション（Animation）をどう略してもAnimeというスペルにならないことから、欧米ではそう思われている。

そして、アニメは実に世界で人気がある。世界で放映されているアニメの大半は日本のものだ。外国人が言うには、「私達が、アニメは子供達の物だという古臭い認識に捕らわれている間に、日本人はアニメで様々な表現作品をつくりあげてきた」とのことだ。

実際、日本のアニメ作品には様々なものがある。子供向けのものから昔ながらの単純な勧善懲悪もの、暴力的なものから性的・ロマン的なものや社会風刺・ミステリアスのようなものまで、あげるとキリがないほどだ。

たしかに、枠にとらわれない日本のアニメは、世界的にも優れていると思う。

しかし…

『見ておくれコロんちゃん、僕たちの愛の証、結婚指輪だよ』
エンゲージリング

『まあ、素敵！この小さな銀の指輪が、私達を永遠に繋ぎとめるのね！』

『そうとも！永遠に一緒だよコロんちゃん！』

『ああ、モツ君！』

『待ちなさい、コロん！』

『！？お父様！？』

『義父さん？！』

『この婚約は取り消しだ。その男と縁を切りなさい、コロん』

『ええ？！何ですの、お父様！』

『さっきまで、僕たちの婚約に賛成してくれていたじゃないですか！』

『…さつき、君の戸籍謄本を見せてもらったよ。それで分かったんだ…君が…』

コロンの生き別れの兄だとね！！！！』

『なな、なんだってー！？？』

『それに君は、猫谷家のご夫人と関係を持っているそうじゃないか！！！！』

『？！そんな！本当ですよ？モツ君！！』

『違うんだ！コロン、あれは一夜の過ちだったんだよ！！』

『随分な言い草ね、モツ君』

『？！貴女は、猫谷家のご夫人、ネルさん！！』

『一夜の過ちですって！？このお腹の中には、貴方の子供がいるの』

よ！！！！！』

『なな、なんだってー！？』

『自分の妹に思いを寄せ、夫のいる身であるご夫人に関係をせまり、あまつさえ子供作るとは！君はなんていう獣なんだ、モツ君！！！！』

こういうアニメはどうなんだろう…

今、アンとサンがかじりつくように見ているテレビアニメは、日本で人気のある教育番組”森の昼下がり”っていうらしい。

ユキさんに聞いたところでは子供向けの有名なアニメなんだとか。肝心のストーリーは、森の村に住むモツ君が、名家であるリス山家に使用人として使え、そこのお嬢様に恋をするというところから始まる。

最初、二人の関係は順調だけど、しかし、モツ君は見かけによらずかなりのプレイボーイで、村の女の子達と次々に関係を持ってしまい、二人の恋路は波乱万丈なものになっていくという…昼ドラばりのドロドロ展開になる。

こんなのが教育番組というのだから驚くしかない。子供達にも大人の恋を知ってほしい、というコンセプトから製作されたいけど、個人的には製作スタッフの神経構造を疑っている。

「いけ！そんなアバズレ売女ビッチなんか張つ倒すのよモツ君！」

「ああ！駄目だよお、ネルさん、包丁なんか握り締めたらあ」

…こんなのが、平均視聴率15%なんだからなあ。

モツ君に夢中になっている二人を眺めていても仕方ないので、腰を上げた。ユキさんがクーと怜と一緒に買い物から戻ってくるまでに、夕飯の支度くらいしておいた方がいいかもしれない。もう時計の針は六時半を回っていた。

そうだ、と思いついて、台所に立つ前に外に出てみる。そとは夕日に暮れていた。

高台に立つユキさんの家からの眺めは、案外いいものだ。町の半分を一望できる。

ここの町の名は”涼ヶ丘”すずみがおかというらしい。

海に接する静かなこの町は、一年を通して海からの風に木々を揺らしている。

かつて日本中を覆った開発の波に乗り遅れたために、普通なら整備され、リゾートホテルが立ち並ぶような綺麗な海岸線は、今現在でも昔ながらの姿を保っていた。

関東地域の東、空の玄関である新東京国際空港まで車で一時間半のこの町は、知る人ぞ知るバカンスの聖地だったが、それでも大した

数の観光客は来ないらしい。

今でも町民の数は緩やかに減り続けており、ユキさんのおじいさんである佐伯俊夫さんは、そんな静かなこの町を、余生を送るのに最も素敵な場所だと生前語っていたと、ユキさんが話してくれた。

確かに、生い茂る木々の緑と、入り組んだ入り江の青い海水の色が支配するこの町は、外国人のボクにでも何処と無く故郷の香りを感じる事が出来る。残り短い命を持った人がここに足を踏み入れたなら、誰もがここに骨を埋めようと思うのは当然かもしれない。

六時半の夕日に照らされるこの町の綺麗な晩日の姿は、そんな話に強い説得力を持たせてくれる。

夕風が、ボクの頬を撫でた。

ここでその生涯を終えたユキさんのおじいさんは、どのような人だったのだろう。

かつてボクの祖父に聞いたところでは、体格はそれほど良くなく、お世辞にも勇猛そうには見えなかったそうだ。だが、確実に記憶に残るような、独特な雰囲気的人物だったらしい。

祖父との約束を律儀に守り、敗戦後にあの潜水艦U-158から”彼女達”を救い出し、誰に売る訳でもなく丁重に管理していた人物…

一度は会って話をしたかった。きっと、面白い昔話をしてくれただろう。とても面白い話を。

あの頃、”彼女達”を”狙っていた””連中”は、彼ら達だけでは

なかったはずだ。

”色々と苦勞した” だろうに…

すると途端に、町に広がる夕焼けの赤い色が、不気味な深紅に変わったような気がした。

あの頃から時代は変わった。戦争の世紀は終わったし、世界中では平和が常識なものになっている。だけど、それでも”彼女達”に付きまとう”影”がいなくなったわけではない。

ユキさんのおじいさんは、そのリスクを十分に承知していたに違いないだろう。あの戦争を生き抜いてきた人なのだから、どうすべきかも分かっていたはずだ。

だがユキさんは違う。まったくの一般人だ。”彼女達”のリスクについてなんて、考えたこともないだろう。

話しておくべきか、それとも心配のしすぎか…

頭を悩ましていると、不意にお腹の虫が鳴いた。

「……」

…先に腹ごしらえかな。まあ、このことについては後で考えるとして、夕飯の用意をしよう。

そう思って玄関をくぐり、台所へ向かうと、アン達がいる居間の方

から例のアニメの大音量が聞こえてきた。

『きゃああああ!!!!』

『ああ!猫谷家のご夫人!!』

『モツ君!!なんていうことを...』

『なんてことだ...僕は、またしても...人を殺めてしまった...』

『またしても...?!ということは、君は以前にも...!?!』

『ええ...実は、5年前の町長殺しも、僕がやったんです...』

『なな、なんだってー?!』

『さらに10年前の連続殺人事件も!』

『なな、なんだってー?!』

『そのうえ15年前の銀行強盗事件も!』

『なな、なんだってー?!』

『言わずもがな20年前の村人30人強盗撲殺市中引き回し逆十文字固め事件も!!』

『なな、なんだってー?!』

『ああ、私の愛した人は許されざる咎人だったのね…それでも私の燃えるような熱い想いが絶えることは無い…なんていう、罪深い恋なのかしら…!!』

『衝撃的なことに30年前の連続爆弾テロも僕(略)』

製作者は、どうやってあのアニメを終わらすつもりなのだろう。

じゅうに 食卓（前書き）

更新が遅い。遅すぎる…

じゅうに 食卓

「「「いただきます！」」」

東関東の静かな港町「涼ヶ丘」を一望出来る小高い丘の上、今は亡き佐伯俊夫邸の居間に、二人の男と四人の少女の声が響いた。

「飯！飯だ！！」

クーの女の子にあるまじき汚い言葉遣いも、空腹の前にはさほど気にならない。

「ちょっと材料と時間が無かったけど、美味しく出来てると思いますよ」

エプロンに身を包みながらアシュレイが微笑んだ。

俺が隣町のショッピングモールにクー達の服やその他の日用品を買い出しに言っている間、アシュレイが先に飯の支度をしていてくれていたらしい。

居間のテーブルにはハンバーグやソーセージ、ジョガイモ料理など、いかにもドイツ人らしい夕飯が並んでいた。

「日本人であるユキさんの口に合うか分かりませんが……」

アシュレイが少し心配げに向かいに座っている俺の顔を覗き込んでくる。

「いや、ありがたいよ。いつもコンビニの弁当で済ませてたから」

男ならもつと堂々としろ！といらぬ注文をつけたくなったが空腹であつたことと食事を用意してくれた恩からその言葉は引つ込めておくことにした。

もつとも、俺の家（正しくはじいちゃんの家だが今は俺の家だ）に住ませてやるんだから、これぐらいはしておいて然るべきかもしれないが……

「む！美味い！！」

俺が感想を言う前に、クー達が先に口を開いた。子供だけあつて食事に手をつけるのが早い。

「……結構いけるわね」

「おいひいほお」

まだ年端もいかない（生まれてから60年以上経ってはいるが）小さな少女達のかざりつけの無い純粋な誉め言葉に、アシュレイも頬を緩ませていた。

その光景を見て、自分が誉め言葉を掛けた時にでも、あんな笑顔を見せるだろうかと思議な考えが頭をよぎった。

答えは、きつとNOだろう。

大人の（それも男の）俺が言ってもそうはならない。やはり子供というのは、人間の感情の深いところに直接訴えかけてくるような魅力を持っているわけだ。

もちろん、それは人間兵器として加工された彼女達とて例外ではない。

「ちょっとクー！あんたジャガイモ取りすぎよ！」

「アン、サバンナの草原では力ある者のみに食する権利が与えられるのだ！日本の食卓とて例外ではない！！」

テーブルの互い向かいに座るアンとクーが、卓上の中央に添えられたベーコンを乗せたジャガイモ料理の取り分をめぐっていがみ合っていた。

なんとも子供らしい。

傍から見ていてなかなか微笑ましい光景だ。

だが、こんなおどけない少女たちも、歴史が一步、いや半歩違っていたならば殺人兵器として一生を終えていたかもしれない。

60年以上前、ヨーロッパで苦しい戦いを強いられていたナチス・ドイツが、戦局挽回のために開発したのが彼女達だった。

クー達は幼い外見とは裏腹に、強靱な肉体とすさまじい暴力（これは昨日我が家の壁を粉碎したことで確認した）、さらに極限まで高められた学習能力を併せ持っている。

それも全て戦争遂行の道具として作られた結果だ。

60年経つても外見にほぼ老化が見られないのも、子供であつたほうが敵を欺きやすいためだろう。

そんな生い立ちを知らば、彼女達の綺麗なサラサラした黄金色の髪も、白い柔肌も、兵器としての凶暴性を隠しぬく為に羽織られたオブラートのように見えてならない。

しかし、

「ちょっとサン！なに人のご飯食べようとしてんのよー！」

「だってご飯少ないもおん……」

しかしそれでも、こんな子供っぽい姿を見てしまうと、彼女達と、毎日家の前を通る近所の鬼ごっこが好きな子供達の間、なんら相

違点など存在しないと思ってしまう。

「だあーから人を取るなって言ってるでしょー！！！」

やはり彼女達も子供なのだ。

その横顔を見ていると、穢れのない純真さに心が透き通される気がして、どこことなく彼女達の笑顔を永遠に記憶しておきたくなる。

かつてのナチスの軍人、つまり彼女達を作り上げた人々、アシュレイの祖父達が、彼女達を日本に脱出させるという選択を取ったのも、このような心理が働いていたのだろうとどうしても思ってしまう。

彼らのうちの誰かが、彼女達を戦場に送ることに躊躇したのではないか、彼女達に戦争兵器ではなく、ただの少女として60年前のあの時代を生き抜いて欲しかったのではないか。

これは単なる願望に似た推測だ。事実とは異なるだろう。ナチスの戦争遂行者達が情に流されて行動することはあるまい。

しかし、どこことなく、そんな気がしてならないのだ。

彼女達の綺麗で純真な横顔を見ていると、心が揺さぶられるような気がする

「
て、おい」

悠久の歴史、半世紀以上前の軍人達の世界から食卓に視線を戻すと、俺の皿に怜が箸を伸ばしていた。

「…怜、人のものに勝手に手をつけるな…」

怜が少し悪い考えに身を任せてしまったのだろと思い、躰のためにもちよつと凄みを加えた口調で注意した。

が、次の瞬間に、コレが怜のいたずら心からしでかしたことでないのが分かった。

怜の料理を盛り付けた皿が、盛大にひっくり返されていたのだ。

具が悲惨なまでに飛び散っていた。

つまり自分の分が台無しになったので俺の分に手をつけようとした、と…

もちろん、俺が次の瞬間頭に浮かべた疑問というのは

「おい、それどうして」

その言葉は途中で、甲高い金切り声によって遮られた。

「ちよつとクー……！アンタいい加減遠慮しなさいよ……！ちよつとは遠慮しなさい……！全部一人で平らげるつもり……？半分よこせつっの……！」

「ムー……ほほふある……！（断る……！）はいほのふあひふあ

「……（早いもの勝ちだ……）」

「この大食い野郎……！アンタの光速消費に間に合うワケないでしょ……！ノド笛掻っ切ってやるわよ……！」

飯をめぐるクーとアンとのいさかいが、卓上を舞台にした紛争に発展していた。

怒鳴り散らすアンと飯を片っ端からほおばるクー、二人の喧嘩のどばっちりを受けて皿をひっくり返された怜に、時々アンが振り回す腕に頭をぶつけておるおるするサン、喧嘩するクーとアンをなだめようとまったく拘束力の無い呼びかけを続けるアシュレイ。

もはやテーブルは飛び散ったおかずで悲惨なことになっていた。

ぐちゃぐちゃになった自分のおかずを前に、どうにかして欲しい、とどことない感情のこもった瞳でこちらを眺める怜がかわいそうではない。

クーとアンの二人は依然としてお互いの箸をぶつけ合って格闘していた。

「……うん、そろそろ怒ったほうがいいな……」

そうつぶやいた次の瞬間、クーの皿に盛り付けられたハンバーグを射止めようと放たれたアンの箸を、クーが見事に捌いた。んが、そ

の衝撃で側に置いていたハンバーグソースが盛大に吹っ飛び、俺の顔に茶色のソースがたっぷりぶちまけられた。

ちょっと酸味のきいた甘辛いソースが、肌を潤す。

俺が、その次の瞬間に張り上げた怒号のすさまじさは、翌朝、ご近所さんの井戸端会議の主題になるのに十分だった。

じゅうさん 記憶

西暦1945年 1月 18日
フランス北部 アルデンヌ地方

極寒と称するに十分値する寒さだった。

吐く息は真っ白に煙り、二重に着た防寒着も震える体を落ち着かせることは出来なかった。

露出した顔を突き刺すような寒さが襲う。

指先に感覚は無い。中隊は寒空の下、体を寄せ合って夜を越した。

情けなく垂れてきた鼻水をそそる。

今や極限状態に置かれた我が中隊隊員は、たった一人の少女を取り囲むように、雪に埋もれたアルデンヌの森の中を突っ立っていた。

むさ苦しい軍人達に取り囲まれた哀れな少女。ショートヘアのサラサラな金髪が綺麗な、年端もいかないこの小さな少女が、今となつては壊走寸前の我が中隊に置いて唯一の希望でもあり、不幸を告げる前触れ鳥でもあった。

少女は、10センチは雪が積もった地面に膝を着き、目を閉じ両の手を胸の前で組みながら、まるで神様に祈るかのような姿勢で数分前から黙りこけている。

「中隊長殿、彼女は…」

「フェスラー、今は黙っているんだ。彼女の邪魔になる」

意見を申し立てようとした下士官を、小声で制した。

今はあまり雑談は出来ない。彼女の邪魔になるからだ。

我々の目の前で黙って祈り続けるこの少女は、別に中隊が捕らえた捕虜でもなければ拉致した民間人でもない。

彼女は、まさしく、間違ふことなきドイツ第三帝国軍人なのだ。もう少し言えば、武装親衛隊の正式な隊員でもある。もちろん、彼女の身を包むのは無骨な軍服だ。

彼女が、いや彼女「達」が私の中隊にやって来たのは、今から一ヶ月前のことだった。

フランス北部に突出した連合軍に対する大規模奇襲反撃作戦、ヴァハト・アム・ライン作戦を間近に控えての頃、軍集団本部から「新兵器の実地試験」として私の部隊に彼女達が「配備」されたのだ。

新兵器と聞いていたものだから最初彼女達を見たときは目が点になったし、何かの冗談だと思った。

彼女らと一緒にやって来たシュトライヒャーとか言う大尉の話によ

れば、彼女達は本物の「兵器」なのだそうだ。
曰く、薬物投与と遺伝操作によって人工的に製造・強化された「新人類」と。

始めそれを聞いた時には耳を疑い、次に彼女達の実力を見たときには目を疑った。

格闘能力も、記憶力も、射撃能力も、体力も、果てには経験に基づく勘さえも、我が中隊の誰よりも一歩、いや二歩以上秀でていたのだ。

私の部下と、彼らを一級品の兵士だと自負していた私自身も、たかが10歳程度の少女に面目を完全につぶされた。シュトライヒャー大尉は勝ち誇った顔で彼女達の頭を撫でていた。

大尉によれば、軍本部では彼女達のことを「ヴェーアヴォルフ戦狼」と呼称しているらしい。

なるほど、その実力はまさしく戦いに身を投じる狼と例えるに十分なものだった。

「……………」

今祈り続けている彼女、部隊の中では余計な情を持たせない為に彼女達のことを「人形」と呼んでいるが、この祈りを捧げている人形の名前は「ツイーリア」

私の部隊に配備された8体の「戦狼」の中で、もつとも索敵能力の秀でた「人形」だった。

どういったことだか分からないが、彼女は姿も音も聞こえない敵の

姿を見つけ出すことが出来るのだ。既に過去に二度、敵の陣地とその構成をこと細やかに言い当てたことがある。彼女はまさしく我が中隊の目であった。

その彼女が今朝、夜が明けて間もない早朝に、私の元にやって来て服の裾をクイクイと引つ張るのだ。言うには、夢で敵が来るのを感じた、とのこと。

普通なら本気にも気にも留めないことだが、彼女が言うのだ。私は歩哨についていなかった他の兵士をたたき起こし、彼女に索敵を依頼した。

そして、今我々は祈るような姿勢で敵の位置を掴もうと全神経を集中しているツエツイーリアを取り囲んでいるのだ。

広範囲の索敵には強い第六感が必要らしく、極限まで集中力が高められる。

だから、余計な物音は立ててはならないのだ。

雪に埋もれたアルデンヌの森の一角が、静寂に包まれる。兵士は皆、早く索敵の結果を知りたがっているようだった。

そりゃ、自分達の命が掛かっているんだから当たり前だが。

そろそろ兵士達も黙っているのが限界だと見えたところ、遂にツエツイーリアの目蓋が開いた。

中隊全員の表情がにわかに変わり、幼いツエツイーリアの顔が、彼女の正面にたたずむ私を見上げた。私の心臓が心拍数を上げるのが分かる。

「……どうだ。敵の存在は分かったか」

私は、出来るだけ落ち着いてツェツィーリアに話しかけた。

彼女は、ツェツィーリアはただ静かにうなづく。

「お前の感じた通り、敵は存在するのか」

「…存在する」

そのツェツィーリアの答えを聞いて、他の兵士達が心の中でため息を着いたのが分かった。

既に私の部隊は度重なる戦闘で疲労が頂点にまで高まりつつあったからだ。

出来ることなら、兵士達はもう少し休んでいるかこのまま戦線から離脱したいに違いない。

彼らはもう十分戦ったし、大勢の仲間と弾薬を失っていた。

しかし、そうも言ってはられないのが戦争だ。

私はツェツィーリアに決定的な質問をした。

「…敵の位置と規模は。接触するまであとどれくらいだ？」

「…街道沿いに800メートル西…戦車3輜を先頭に追隨する歩兵が600名…まっすぐこっちに向かってくる…会敵は…およそ8分後」

中隊の間に、なんとも言えない空気が広がったのが分かる。

「…そうか、よくやってくれた。凄いぞ」

私はそう誉めてツェツィーリアの頭を撫でた。そこに存在する強大な敵を知った、なんとも言いがたい自分の気持ちさをなだめるように。

「…中隊長殿、どうなさるおつもりで？」

後ろに控えていたフェスラー少尉が小さく口を開いた。

「…愚問だな少尉。我が中隊は連隊本部から友軍撤退までの殿軍^{しんがり}を任されている。まさか撤退するワケにも行くまい…ここで奴らを迎え撃つ。それ以外に選択肢は無い」

当たり前の判断だった。約二週間前に発動された奇襲反撃作戦ヴァルト・アム・ライン作戦は既に破綻していた。友軍は各地で敗走し、連合軍は空と陸から包囲殲滅を開始している。

戦局が破滅に向かう中、私の中隊は味方連隊が戦線を離脱するまでここで敵の足止めをすることを命ぜられていた。

これが殿軍。悪く言えば時間稼ぎの捨て駒だった。

もちろん兵士は死にたいとは思っていない。口には出さない（とい

うか出せない」が、不満ありありのようだ。
そんな兵士達の意見を、フェスラー少尉が代弁する。

「しかし我が中隊は今や200名足らずで、半分が怪我人です。片や敵は一個大隊……」

「撤退したいとでも言いたいのか。今我々が連中を止めなければ撤退中の味方が背後から食いつかれることになる。ここで敵の足を止めなければならん。それが我々の任務だ」

つまり我々はここで全滅しかねない戦いを仕掛けなければならないわけだ。どれほど危険かということか重々承知していながらも。

兵士達の顔が、一気に重くなっていた。

皆、あえて地獄に突き進もうとする私を恨むような灰色の瞳で眺めている。

そのなかで、ただ一人ツエツィーリアだけが、なんの淀みのない蒼い瞳で、私を見つめていた。

アルデンヌの森に雪が降る。

「……行こう、ツエツィーリア。戦争だ」

それから61年後
日本

「…………ソファの下」

「…………！！おお、ホントにあったぞ！テレビのリモコンだ！なんで分かるんだ、怜？！」

「ホントに凄いですね、ユキさん。閉まったところを忘れた年代物のお酒から無くした耳かき、今度はリモコンまで。目をつぶってちよっと考えただけで場所が分かるなんて」

「いや、何はともあれ、見つかってよかった！ずっと気になってたんだよ」

「…今度からは…無くしちゃ駄目」

「ああ。よくやってくれた、凄いぞ」

「……！」

「ん？どうした怜」

「ずっと前……同じように……誰かから誉められた気がする……」

「……？デジャブか？」

「……そうかも」

じゅうよん 白服

1944年 11月 17日

ドイツ占領地域 ポーランド首都ワルシャワ

「見てカティア、綺麗な髪飾り」

彼女は髪の長い綺麗な人だった。

長い金色の髪は良くそよ風に揺れていたし、彼女の青い瞳は清流のせせらぎよりも透き通っていた。

上品な物腰で純潔ドイツ人の母と旧ドイツ帝国軍人の父との間に生まれた彼女はまさしく「アーリア人」として存在していた。

それは、私の忠誠を誓うべき祖国において、非のうち用のない完璧で理想的な人物像を指していた。

ただ、彼女は病弱でか弱かった。

すぐ折れてしまう枯れ枝のような四肢だった。

「ほら、似合うよ?」

彼女は私の頭に髪飾りをつけた。その手は微かに震えている。
私はすこし悲しくなった。

「かわいい」

微笑んでも、肉付きを失い痩せこけた頬は泣いている。

その軽い体も生気を亡くした彼女の細い足では支えられず、常に無愛想な車椅子の手助けを必要とされた。

彼女の体は栄養を必要としていたが、長年健康から遠ざかっていたその体は、既に栄養を受け入れる器としての機能を放棄していた。

彼女の体は加速度的に衰弱していく。科学者達が作った薬品も、彼女の体には毒だった。

「カティアはかわいいから、かわいいものが似合うね。でも、可愛くないものは似合わないね」

「カティア」とは、彼女が私に付けた名前だ。元々は違う名前を「本部」から「与えられて」いたのだが、どういうことか彼女の意見が「本部」の決定事項よりも優先されてしまい私の名前が変更された。

彼女が「組織」の上下階層に割り込めるほど特別な存在であることは、明らかだった。

「カティアには可愛くないものは似合わないから、軍服はあまり着て欲しくないなあ」

彼女のこの言葉に、私はいつも悩まされる。

「ですが、戦闘服の着用は義務ですので」

「またその答えだー」

とは言っても、それが理由なのだから仕方が無い。

いつも同じ質問をされては、いつも同じ答えを返さなければならぬのは当たり前だ。

だが、彼女にとってこの問題は極めて重要な懸案事項に関するものらしく、いつも私に同じことを言う。

どうやら彼女は、内心私を軍属から抜けさせたいようなのだ。

彼女にとって私は、いつもワンピースを着て花を摘んでいなければならぬ存在らしい。

しかし、今日、私は、そんな彼女を発狂させてしまいかもしれないことを告げねばならなかった。

しかも、今ここで。

この後すぐに「用事」があるので、今言わねばならないのだ。

私は躊躇わなかった。躊躇することは好ましくないと常に教官から教練中に教えられていたこともあってだ。

「ルクレツィア嬢、お伝えすることが」

「ルクレツィアでいいよ。カティアは私よりずっと年下の女の子なのに、難しい言葉使ったもん」

私は彼女の命令には従わなかった。

「組織」の中には彼女の言葉や扱いにやけに配慮したりする慣行があるようだが、上官でもなければ軍属でもない彼女に従う義務は無いと私は解釈してきた。

それに、私は彼女の素性をあまりよく知らない。

「ルクレツィア嬢、正式に部隊に配属されることになりました」

彼女が面食らっているのが見て取れる。

私は背筋を伸ばし凜として言い放った。

「教練課程も終わり、私は来週から実戦部隊に配属されます」

「実戦つて、戦うってこと？」

「無論です。ローマの兵士がそうしたように、地面を這いずって泥まみれになりながら、敵を打ち倒すべく前進します」

彼女の顔が、暗さを増したのが分かった。

「でもカティアは女の子だよ」

「関係ありません。国家の非常事態においては、老若男女の区別なく全ての戦力結集が必要とされます」

私の声は、さぞかし彼女の意見をはじき返していたに違いない。

「それに私は普通の子供ではありませんから」

「そんなことないよ」

「いいえ、違います。私は戦狼です。^{ヴェーアヴォルフ}戦場の矛なのです。敵を屠る刃です。敵の体を鮮血に染めなければなりません」

「そんなこと言わないで」

ひ弱な彼女の声帯が、怒りに震えた。

「カティアは小さな女の子だよ。普通の女の子はそんなこと言わないよ」

だから「普通の」ではないと、そう言いかけて私はやめた。

病弱なそれとは裏腹に、彼女は頑固者なのだ。

他者の顔色を見て自分の意見を曲げることは無い。

彼女のまっすぐな精神は廃れていくその身体に収まりきらないほど強く旺盛なものだった。

「カティアはあまり笑ってくれないけど、ワンピースもきつと似合うし、今はこんなさびしい施設にいるけど、街に出たらもっと可愛くなると思う」

彼女の声は澄んでいた。

「カティアは兵士じゃなくって、女の子だよ。銃なんか似合わないもつと幸せな生き方をして欲しい」

「個人の幸せが国家の危機よりも優先されることはありません。私には国家と民族のために戦う義務があります」

「戦場に行つて欲しくない」

「義務や必要性は希望よりも優先されます」

「死んじゃうかもしれないんだよ」

「死を恐れる者は、死を恐れない者に淘汰されます」

「人を殺すんだよ」

「仲間を殺されています」

「もう、会えなくなるかもしれないんだよ」

「問題ありません」

彼女は言葉を失った。

瞳がうつすらと涙に潤んでいる。

だが私は譲歩しなかった。

今まで彼女と過ごしてきた時間が、私にとって酷であることは無かった。

いい息抜きになってはいた。

しかし、私には立場がある。

その立場は、彼女の意見を優先するものではなかった。

「……………」

彼女の顔が悲壮に暮れる。

そして、それ以上無駄な言葉を発することはなかった。

彼女は頑固者であったが、決してわからずやでは無い。

「やっぱり、駄目なの…?」

「ご希望には添えません。私には義務があり、勤めを果たさなくてはなりません」

「そっか」

彼女はゆっくりうつむいた。

「うん。カティアは、普通の女の子だもん。私の人形じゃないんだから、言うこと聞いてくれなくても仕方ないよね」

やはりこの一線は譲らないらしい。

私もすっかり諦めていた。

「カティア」

彼女の声色は、すっかりいつもどおり、しかし少し悲しみが混ざったものになっていた。

「お仕事が終わったら、戻ってきてくれる？」

彼女は戦争とは言わなかった。

「無論、戻ってきます」

「そっか。うん、よかった。じゃあ、戻ってきたらさ、あれ着てね？ワンピース。白いの。きっと似合うよ。可愛いやつだから」

それから61年後

日本

新品の独特のにおいがする。

夕食を食べ終わった後、俺はショッピングモールで買ってきた服を取り出した。

クー達の私服だ。

新しく買ってきた服が、彼女達の体に合うか確かめようと思い立った。

無理であれば取り替えてもらおう。

「私！コレ着るわ、この赤いの！あ、これもいいかも」

アンが真っ先に服の山に飛びついた。

「じゃあねじゃあね、あたしはね」

それにサンが続き、部屋はちょっとしたバーゲンセールのようになる。

おとなしい怜も、新品の服の山に興味深らしい。

小さな女の子達が思い思いに服の山に飛びつく姿は、すこし微笑ましい。

みんな服を物色していた。

しかし、その中で、クーだけがその真横で突っ立っていた。

「ユキ、私はコレにする」

やけに早い。

「それでいいのか？もっと好きなの遠慮なく探していいんだぞ。給料はつばたいていつぱい買ってきたんだから」

「いや、これでいい。これを着てみたいんだ」

「そうか、まあ、後で他のも探せ」

クーが選んだ服は白いワンピースだった。

じゅうじ 臆病

1944年 12月 22日
フランス東部 サン・ヴィット

あたりを満たす硝煙の臭いと土煙。耳に雪崩れ込んでくる銃声と爆発音。道路に転がる残骸と死体

その時僕は戦場にいた。

身を軍服に包み、小銃を携え、部隊からはぐれ、一人で民家の壁際で尻餅をつきながら。

体は微かに震えている。恐怖だ。僕は怖い。

今ここから一步でも動いたら、流れ弾が頭を打ち抜くような。

少しでも腕を伸ばせば、手榴弾の破片で腕が吹き飛ばされそうな。得体の知れない、戦場独特の恐怖。

これほどまでに死に近づいたことは今まで一回も無い。

小心者で、喧嘩もしたことがなく、骨折の一つだって経験したことがないのに、戦場で戦えと言われた。

そんなの無理だ。もう家に帰りたい。

どうしようもない恐怖心に抱きしめられながら、うつすらと涙をためた目蓋を、現実から逃げるように力強く閉じた。

体の震えはますます強くなる。

さっき、自分の横にいた同僚が、敵の放った弾丸で頭を撃ち抜かれた。

彼は豪快に脳髓を撒き散らして、地面に崩れ落ちた。それきし動かない。

彼はこの戦場で、僕が唯一恐怖を共有できる生きた人間だった。名前は確かヘンケル。年は20歳。

彼もついさっきまでは、僕と同じように恐怖に震えていた。

それが今は只の肉の塊。

頭が無くなった人形。

人は意図も簡単に、たった一瞬で死体に成れ果てる。

次は自分かもしれない。

そう思ってから、足は一步も動かなくなり、腰は上半身を支えられなくなった。

恐怖に支配され不安から鼓動が早くなり、ストレスで気が狂いそう。

早く、早く終わって欲しい。こんなことは。

僕にはもう耐え切れない。

撃てもしない小銃を握り締めながら、涙粒が溢れ出す目をこすった。子供のように三角座りをし、うつむき顔を隠す。

自殺する勇気も無い。

生殺し。

地獄のそこで、ただ一人恐怖に震えてひたすら悪夢が過ぎ去るのを待つ。

過ぎ去ろうとしない悪夢を。

ついに口から嗚咽が漏れ、情けない泣き声を上げそうになったとき、誰かが地面を踏みしめる音がした。

ヘンケルが殺されてから、初めて自分のいる空間に誰かが足を踏み入れたのだ。

敵？殺される？

それとも味方か。

僕は閉じた目蓋を開き、涙と鼻水でくしゃくしゃになった顔を上げた。

もし敵なら戦わなければならぬが、小銃を構えることは無い。もう僕は兵士としては死んだも同然なのだ。

だがそこにいたのは、敵ではなかった。

少女。

少しウェーブのかかった綺麗な長髪の、少女だった。年は10ぐらいの。

戦場には全く不釣り合いの、綺麗な少女。

可憐な姿と、身に纏う親衛隊の黒い戦闘服が、なんともちぐはぐに思えた。

そして、なぜこんな少女がこんなところにいるのかも。ちぐはぐだ。

「あ…」

とつさに声が漏れる。

だが彼女は僕に構うことなく、道端に斃れている頭部を失ったヘンケルの死体から、小銃と弾薬を剥ぎ取った。

そして血まみれの銃の感触を確かめつつ、僕に向けて華奢な口から言葉をはなつ。

「で、暇なら付き合ってくれないかしら？」

その言葉に、僕は一瞬呆気にとられた顔をした。

「え？」

「これから戦わなきゃならないの。まだアングロサクソンどもが道路にウジャウジャと溜まつてるわ。アンタもこんなところでサボってないで、ちゃんと仕事しなさいよ」

ふたまわりは年上の僕に対して、彼女は母親のように言い放った。ただ僕は、大して大きな態度に出れない。

「前線はもつと先よ。アナタここでどんだけ時間つぶしてんのよ」

「き…君は…」

「私は負傷者の後送のためにここまで来たの。すぐに戻らなきゃならないわ」

「あ、そうじゃなくて……誰」

彼女は怪訝な顔をして、僕を見つめた。

僕の口から漏れた言葉は意識せずのものだ。

誰だって戦場に軍服に身を包んだ少女に出くわしたら、こんな言葉を吐く。

彼女は眉間に少ししわを寄せて、口を尖らせながら言う。

「いちいち尻餅ついてサボってる職務怠慢者に自己紹介しなければ駄目かしら？……エリノアよ」

彼女は嫌々ながらもそう答えた。
エリノア。彼女の名前らしい。

「これで満足ね。さあ、行くわよ」

だが、僕は腰を上げない。
上げられなかった。

立ち去ろうとする少女は、そんな僕を見て足を止めた。

「ちょっと、人の話し聞いてた？」

「…む…無理だ」

僕は、情けない本音を絞り出す。

「た、立てない」

それは、10歳の少女に見せるにはあまりにも惨めな姿だった。

「…呆れた。こんなところで何してるかと思ったら、臆病風に吹かれて逃げ出してた訳ね。…まあ、アナタの顔見たら一目瞭然だけど」

僕は、鼻水をすすり、涙まみれになった頬を手で拭った。

「アナタが着てるその服、親衛隊の軍服でしょ？まさか、武装親衛隊にこんな臆病者がいるとは思わなかったわ。アナタ、それでいいわけ？自分の横で仲間の死体が転がってるのに、仕返しの一つもしたくないの？」

彼女は僕を蔑んでいた。返す言葉もなく、ただ内心で許しを請う。こんなことにはいつの間にか慣れてしまっていた。情けないと思うよりも、逃げ出したい。

「そう、じゃあ、そこで尻餅について全てが終わるのを待っているといいわ。子猫みたいに震えながら、ドブネズミのように惨めにね」

彼女はそう吐き捨て、立ち去ろうとする。

その姿を見ても、僕の情けない性根は変わろうとしない。

震える体をさらに震わせながら、ここにやってくるかもしれない敵兵を、少女が倒してくれることを願った。

本当に情けない自分。

僕は戦えない。

喧嘩の一つだつて出来ないのだから。

戦場に来たのは、何かの間違いなのだ。

これが、等身大の自分。

戦えなくて当たり前だ。

だが、

そうだけれども、

そうとしても、

やはり僕は、それでも男なのだ。

あんな少女にあれほど言われて、黙っていることを、心のどこかにいる誰かが、よしとしなかった。

恐怖がまだ僕の足を絡め取っているにも関わらず、腰を上げた。

体は恐怖に震えている。

頬の涙はまだ乾ききっていない。

本音は逃げ出したい。

だが、戦わなければならない。

おぼつかない足取りで、僕は戦場に消えた少女の後姿を追いかけた。

それから61年後
日本

「うわーん恐かったよぉ!!」

「ったく、ゴキブリくらい一人で退治しなさいよ、サン!」

「む、無理だよぉ、ゴキブリ怖いよぉ」

「ゴキブリ一匹殺せないなんて、ホントに臆病者ね。ドブネズミの
ように惨めだわ」

「ど…ドブネズミって…酷すぎるよお…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7737a/>

独立機甲義妹旅団！パンツァー・グレナディア

2010年10月9日04時48分発行